

# 外陣講義文書

「第1講義文書」  
(0 = 0 プロベイショナー)

## 第10章

### 喚起魔術

- |   |            |
|---|------------|
| 1 | 魔術師のプロトコール |
| 2 | クリポトの世界    |
| 3 | 魔王の座       |
| 4 | 四大の性質      |
| 5 | 四大の意識開発    |
| 6 | 四大の象徴武器    |
| 7 | 喚起魔術       |
| 8 | 諸次元への上昇    |
|   | 課題瞑想：無の瞑想  |

THE OFFICIAL ORGAN  
OF  
I.:O.:S.:

PUBLICATION IN CLASSES C~D  
IMPRIMATUR: M FRATER I.:O.:S.:

First published in 1986 by I.:O.:S.: private edition (ver.1).

Second published in 1998 by Sekibunsha (ver.4).

Third published in 2005 online versions by I.:O.:S.: (ver.5).

This Edition Fourth, Revised and Expanded in 2013 (ver.6).

All rights reserved. © Tzutom Akibba 1986, 1998, 2005 and 2013

# 知識講座

## 1 魔術師のプロトコール

どのような組織であろうと構成員の求心力を高め団結を強化するために組織独特の取り決め、習慣、隠語、符丁などをもっている。魔術結社はメイソンの秘密主義を受け継いだ者が多いので特にそれが顕著である。われわれ新参の魔術師が、年長の兄弟たちと会話して恥をかかないためにも、ある程度常識と化した、それらのプロトコールを了解しておくことは必要である。

ここでは主として《黄金の夜明け》団を例に取って、一般化した慣習等を紹介しておく。その多くは I : O : S : でもそのまま使えるか、或いは多少の解釈を交えて適用できるものだ。

### (1) 魔術師への呼びかけ

男性の魔術師には、魔法名の前に「兄弟」を、女性の魔術師には「姉妹」を冠して呼びかける。カトリックの修道師をフラ・アンジェリコなどと呼ぶのと同じである。これをラテン語で書くと、FRATER (複数形FRATRES)、またはSOROR (複数形SORORES) などになるが、ラテン語発音ではなく英語読みで、英単語として扱う。この原則は、やや徹底を欠く態度に見えるかもしれないが、今更、団の指導者をインペラートルと呼ぶ訳にはいかない《黄金の夜明け》団の矛盾点が継承されたものである。

略称は、Fra. S. I. G. や Sor. M. D. U. のようにつづめて書く。メイソン風の色をつけるときは、Fra : Sup : Trigramataのように三点兄弟をつけることもある。

位階や役職によって呼びかけ方が違う場合がある。<sup>(1)</sup>

- G. H. Frater (Soror) 内陣団員高位階者へ 「真に誉むべき」 (Greatly Honoured)
- V. H. Frater (Soror) 内陣団員へ 「誠に誉むべき」 (Very Honoured)
- H. Frater (Soror) 外陣団員高位階者へ 「誉むべき」 (Honoured)

しかし、これはフォーマルな場合である。普段、呼びかけるのに「真に誉むべき兄弟ジュディキオ・アクリ・ペルペンデルに物申す。」というのは変だ。

また、気軽に「兄弟〇〇」、「姉妹〇〇」というのも良いのではなからうか。本来、他の団員の階級は、同位階級になるまで知らされないのが原則だからだ。

日本語の場合、「Elder Brother (兄貴、兄さん) !」という別の世界を想起させるので工夫が必要であろう。

### (2) 手紙の書き方

団員同志の手紙のやり取りには幾つかの符丁が存在した。

切手を横向きに貼る。英国の切手は女王陛下の横向きの顔であったので、それを上に向けて貼ると、パロケトの境界を越えたアダプトの通信であることを意味していた。まあ、どこの秘密結社にもある他愛ない遊びである。中国の結社ではお茶を飲む複雑怪奇なルールがあり、その方がよほど難解である。

個人的な用向きときはともかく、団の内容をやりとりするときは、「兄弟誰其気付」という表現を「敬愛すべき紳士 (淑女) 誰某」の代りに用いていた。

Care et G. H. Frater O. Z. 或いは、C. et V. H. Soror S. D. P. などのように用いられる。

ご存知のようにアレイスター・クロウリーは、ラテン語もどきの Cara Soror, という宛て書きを用いている。この辺りになると趣味の問題かもしれない。プロベイショナー諸君が手紙

---

(1) Ellic Howe, *The Magicians of the Golden Dawn*, York Beach : Samuel Weiser, 1978, passim.

を書くときは、相手の位階に応じた宛て名を考えるべきであるが、分からなければ慎重にすべきであろう。

結びの文句も同じである。

「Yours fraternally, 署名」が定番である。<sup>(2)</sup> または、Yours in fraternity and sincerity など。うがったものでは、Yours always, with Hermetic Love というものもある。

公式の文書においては、次のような例もある。

To the V. H. Fratres and Sorores	誠に誉むべき兄弟姉妹たちよ
Levavi Oculos	(パーシー・ブロックの魔法名)
Sapientia Sapienti Dona Date	(フローレンス・ファーの魔法名)
Resurgam	(エドワード・ベリッジ博士の魔法名)
Fortiter et Recte	(アニー・ホーニマンの魔法名)
Ave, Fratres et Sorores,	
— 本文 —	
Vale Fratres et Sorores	
Sub Umbra Alarum Tuarum	
Deo Duce Comite Ferro 7=4	

末尾の2行目は有名な『宣言』<sup>フアム</sup>の結びの文章、「汝の翼の陰の下に」である。

「兄弟姉妹たちよ」の頭につく文字、Aveは「誉むべし」、Valeは「健やかならんことを」という意味である。

しかし、これらの形式は薔薇十字団の伝説に基づく遊びである。形式を踏むことや、形に捕らわれる必要はない。日本語の手紙は縦書きが定版だから、これらの形式を無視しても問題ない。だが、一面、遊ぶなら真剣にはまって遊ぼうという見方もある。

また、封書に貼る切手の向きを変えろという符丁があった。当時の切手は女王陛下の横顔であったから、顔が上を向く、すなわち内陣にある者の合図であった。しかし、今日の様々な意匠の切手でこれを真似ても意味はない。

### (3) 握手法及びサインなど

これはメイソン系の団体が、対面した相手が秘密をともにする仲間であるかどうかを判定するために用いる。他人が同席していても不自然に思われず行えるのが握手法である。握り方の微妙な違いで相手の階級が判定できる。儀式的な動作を伴うのがサインである。《黄金の夜明け》団のサインは公表されており、既に団員識別法としての意味は失った。しかし、魔術的な意味は保持し続けている。

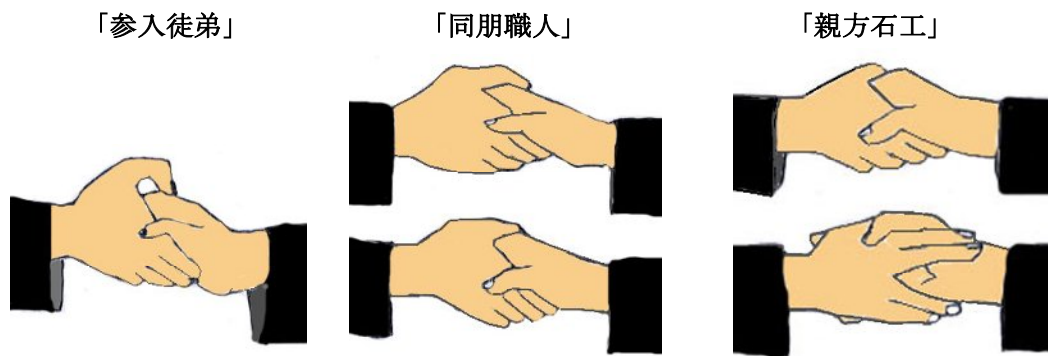
従って、《黄金の夜明け》系列の魔術結社は、符丁としての手順を別に定める必要がある。

ここにサンプルとして、ブルー・ロッジ（スコットランド古典儀礼の「参入徒弟」、「同朋職人」、「親方石工」の三階級）の例を示す。<sup>(3)</sup>

(2) Ellic Howe, *The Alchemist of the Golden Dawn*, Wellingborough : The Aquarian Press, 1985, pp.21ff.

(3) M. C. Duncan, *Duncan's masonic ritual and Monitor*, New York : David McKay Company, n.d., passim.

## a 握手法 (grips)



参入徒弟：自分の親指で相手の人差し指の付け根（中手指節関節）の上を押さえる。

同朋職人：参入徒弟の握手法から始める。

- 通過握手（シボレス） — 親指を相手の人差し指と中指の付け根の間に移動する。
- 真の握手（ヤキ） — 親指を相手の中指の付け根に移動する。

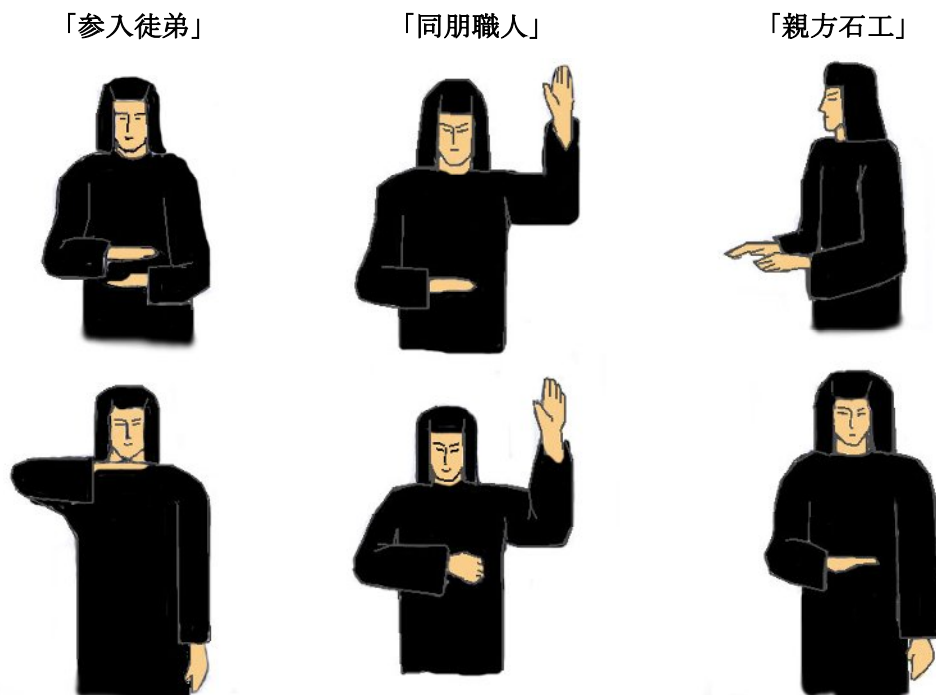
親方石工：同朋職人の握手法から始める。

- 通過握手（トバル・カイン） — 親指を相手の中指と薬指の付け根の間に移動する。
- 真の握手（マ・ハ・ボン） — 親指は普通に、人差し指と中指、薬指と小指を揃えて相手の手を包むように握る。

これらには歩法も加わっている。

## b 合図法 (signs)

合図法には、上図の設問とそれに他する下図の返答がある。



参入徒弟：マスターの設問「わが左手は聖書を支え、右手はその上に置かれる。」  
徒弟の合図は誓いを破った場合の刑罰（喉を切り裂く）を示す。

同朋職人：マスターの設問「わが右手は聖書に置かれ、左手で誓う。」  
職人の合図は誓いを破った場合の刑罰（心臓を貫く）を示す。

親方石工：マスターの設問「わが両手は聖書に置かれ、誓う。」  
親方の合図は誓いを破った場合の刑罰（腹部を刺す）を示す。

以上は、あくまで参考である。

この種の符丁は知れ渡ったら意味がないので、それぞれの団体が必要と思えば自ら作成してもらいたい（OTOのように衆知のサインを日常的に用いる例もあるが、これは識別というより、団員の結束の強化を意図した活動であろう。）。

## 2 クリポトの世界

### (1) クリポトの意味

קְלִיפָּה (クリパー) とは、木の《樹皮》や豌豆の《殻》を指す単語であるが、カバラの伝承では複数形 קְלִיפּוֹת (クリポト) は、光の世界に反するもの、闇の凝集たる領域を示す。伝承によると世界の中心は内光(オール・ペニミ)であり、その外周に魂の光の採掘場があり、その外に天使の光の採掘場があり、そのさらに外側に闇の光、すなわちクリポトの採掘場があると言う。

『雅歌』6章11にソロモン王が胡桃の園に下向するくだりがあり、胡桃の実を聖なるものとし、その殻を悪に位置づけたとの解釈がなされた。<sup>(4)</sup>

クリポトの邪悪の霊を「エドムの王」たちと呼ぶこともある。אֱדוֹם (エドム) とは、ヤコブの子らと戦った部族であり、その祖はヤコブの兄エサウである。『創世記』第25章29節には、長子権を一杯のレンズ豆の煮物のために売り渡した不幸なエサウの話が出てくる。

『その赤いもの、赤いもの(ハアドム ハアドム)を食べさせてくれ。』かれがエドムと呼ばれたのはこのためである。」

むろん、אֱדוֹם と אֱדוֹמִים の語呂合わせだが、エサウが生まれたときの描写も「先に出てきた子供は赤くて(אֱדוֹמִים アドモニ)、全身が毛の(שָׁרְשָׁר שアル)衣のようであったので、エサウ(עֵשָׂו)と名付けた」とある。この אֱדוֹמִים は אֱדוֹם の同語根であり、שָׁרְשָׁר はエドムの別名 שָׁרְשָׁר と同語根である。

《黄金の夜明け》団の伝承では、次のように語られている。

これらは、不浄にして邪悪なるものども、倒錯したセフィロト、つまり墮落した宇宙の妨害者、とぐろ巻く竜の輪である。その等級は11であるが、10と呼ばれる。7つの頭を持つが、8つ目が昇りつつある。7とは冥界の宮殿の数で、その中に10を含んでいる。

樂園喪失のときに「大なるアダム」の没落と同時に「殻の王国」から「大なる赤い竜」が10の角と七つの頭を上昇させ、竜のとぐろはマルクトを包囲し、マルクトを「殻の王国」に結びつけた。竜の7頭は低次の7セフィロトに上り、ダアスにまで達した。そして「竜の頭」の上には「エドムの八王」の名前があり、角には「エドムの11侯爵」の名前があった。竜はダアスのなかで新しい「頭」と「角」を生やしており、「7頭10角の竜」は「8頭11角の竜」となっていたからである。

(『創世記』36章31節-43節 『歴代志上』1章43節-54節)

七頭、八頭の竜というと日本神話の八岐大蛇を思い浮かべるが、この多頭竜という神の敵対者は世界中の創世神話に分散している。

ユダヤ教に多数の痕跡を残したカナン神話群においては、主神バアルとその妻アナトが、原初の海竜ローターン、七頭の専制者ツィヤルト(テュフォーン)を打ち破る。

勝利したバアルは次のように勇み立つ。

「かれは七つの稲妻を放ち、八つの雷の弾倉を、かれは稲妻の槍を振り回す。」<sup>(5)</sup>

樂園喪失の引き金になったのは、蛇の姿をとった「試す者」の助言であった。蛇は古来、女神の象徴である。女性原理である蛇が単独で話しかけるといことは、源初の至福の調和が破

(4) 植村 卍『ユダヤ教思想における悪』晃洋書房、2000年、158-159頁。

(5) F. M. クロス『カナン神話とヘブライ叙事詩』日本基督教団出版局、1997年、199-201頁。

られたことを意味する。生命の木の崩壊は必然であった。

ここでは均衡の破壊のあと、殷の王国がいかにして勢力をダアスより下のセフィロトに伸ばしたかが書かれている。それぞれのセフィラに毒を流し込む竜は下表のとおりである。

なお、この「大いなる赤竜」と「ネフェシュタンの蛇」を混同してはならない。

前述のごとくクリポトと結びつけられた前者に対して、後者はユダヤ教においてモーシェその人にまで遡る聖具「蛇の杖」が表象する「知恵の青銅の蛇」を意味する。<sup>(6)</sup> それは生命の木の生える河の水辺、知恵の苑にいる「小径の蛇」でもある。緑と金色に輝く青銅色の、植物と草木の色合いをもつ天界のエデンの蛇とも呼ばれる。

修行者は、物質と霊の間に、真鍮の蛇の象徴を思い出し、調停者として均衡を取ることを求められる。

ここで問題にしているのは前者の「誘惑の蛇」、「善悪の知識の木」の蛇である。

セフィロト	竜の頭 (王)	竜の角 (侯爵)
ダアス	ベラ	テムナ/アルヤ/イエテテ
ケセド	ヨハブ	アホリバマ
ゲブラー	フシヤム	エラ
ティファレト	ハダド	ピノン
ネツァク	サマラ	ケナズ
ホド	サウル	テマン
イエソド	バール・ハナン	ミブザル/マグディエル
マルクト	ハダル	エラム

それは、聖書外典のとぐろ巻き威嚇する赤竜、地上のエデンの蛇である。先に述べたように楽園喪失のとき、邪悪の蛇は「木」の中にマルクトを囲んで伸び上がり、マルクトを下界、クリポトと結びつけてしまった。これが、すなわち失楽園の罪であり、物質界はとぐろ巻く竜の胴によりセフィロトと分離されてしまったのだ。それ故、マルクトは浄化されるべきであり、贖罪を待ち望んでいる。そのため、キリストも誘惑を斥けるまでは、罪を贖うことはできなかったのである。しかし、総ての創造されたものは必要なのだ。比較されるべき他者なくして存在できるものはない。邪悪もまた仕事を助けるのである。巨大な、濃密な暗黒さえも、光と対比され、それを呼び寄せ、より強く輝かせる故に、暗闇が光の力を増大させたと言えるだろう。

(6) マックス・ウェーバー『古代ユダヤ教』みすず書房、1985年（新装版）、256頁。

## (2) 七天から七地獄

人間の個人的空間認識において、上方は「聖なる空間」であり、下方は「俗なる空間」である。例えば、『旧約聖書』において《ヤコブの夢》または《ヤコブの梯子》と呼ばれる件がある。それは野で石を枕に寝たときに、ヤコブに訪れた幻影である。

スラム ムツァブ アレツァ      ガ'ェロシヨ- マギ'ア ハ・シヤマイ      マラカー エロヒム      オリ-ム ガ'ェ・ヨルテ'イム  
「梯子が地に向かい立てられ、その頂きは天に達し、神の天使たちが、上り下りしている。」  
(『創世記』28章12節)

この梯子は、天(シヤマイ)から地(アレツ)に伸びており、それを天使(マギム)が自在に上下していると描写されている。この情景は神の伝令たちが柱に沿って、ヤコブへと降下したと解釈できる。<sup>(7)</sup>

しかし、一般的には、天と地を結ぶ宇宙軸を梯子(スラム)というイメージで表すものである。伝統的なカバラの説明では、諸天、すなわち「上なるエデン」は七層に別れ、これは七つの地上、「下なるエデン」に対応している。

上なるエデンには七つの天界が、下なるエデンには七つの地球が、そして地下のエデンには七つの地獄が対応する。黄金の夜明け団はクノール・フォン・ローゼンロスの編纂した『カバラ・デヌダータ』に収録された『天界の門』の図版を引用して説明している。

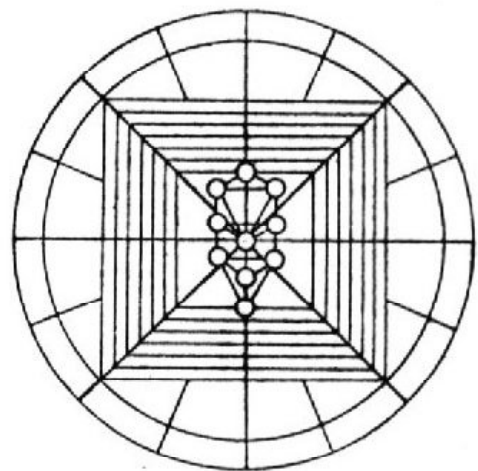
同書の第XVI図は、否定存在からセフィロトの木までの一連の象徴を解説したあと、その下部に列記された12の副図を説明する。<sup>(8)</sup>

### a 天界の門 第XVI図副図T 「エデン図」

上なるエデンの概念を直接説明する副図Tの名称は「エデン図」(Hortum Eden, Garden of Eden)である。

黄金の夜明け団は、少し長めの「エデンの園と黙示録の聖なる都」(the Garden of Eden and the Holy City of Apocalypse)とも呼び、2 = 9儀式において次のように説明した。

外周円は樂園を防護する城壁なり。ケルビムと炎により守られる。七つの正方形は、七つの館、或いは七つの天球であり、ここにテトラグラマトン・エロヒムが食に適するあらゆる植物を植えた。幕屋の帳と神殿内の至聖所の扉に描かれた椰子の木に象徴されるものである。中央に生命の木、神と子羊の座があり、礎石は12にして、門も12である。中央の泉から発する四河は、エデンの四河にして、偏在の霊より発する四元素の象徴なり。<sup>(9)</sup>



中央の泉から発する四河は、エデンの四河にして、偏在の霊より発する四元素の象徴なり。<sup>(9)</sup>

(7) James L. Kugel, *The Ladder of Jacob : Ancient Interpretations of the Biblical Story of Jacob and His Children*, Princeton : Princeton University Press, 2006, pp.14-19.

(8) PORTA COELORUM in Knorr von Rosenroth, *KABBALA DENUDATA I*, Zurich : Georg Olms Verlag, 1999, pp.246-253.

(9) 江口之隆「訳者解説」『黄金の夜明け魔術全書 下巻』国書刊行会、1993年、566、567頁。

R.G.Torrens, *The Secret Rituals of the Golden Dawn*, Wellingborough : The Aquarizn Press, 1973, pp.127f.

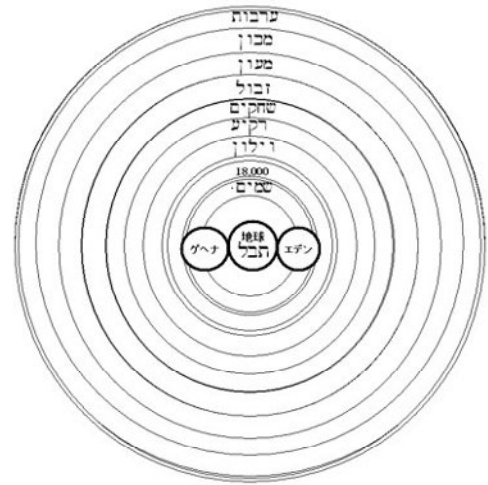


## b 天界の門 第XVI図副図S 「七大天図」

黄金の夜明け団の教義文書のなかでは言及されなかったが、前項の上なるエデンの概念を補足する副図S「七大天図」(Septem coeli, Seven Heavens)がある。

外周円から七つの天球の名称が描かれており、その内容は次のとおり。

1	アラヴォース	雲	ORBVTh
2	マコン	場所	MKVN
3	マホン	棲家	MOVN
4	ゼブル	住居	ZBVL
5	シェカキム	栄光の雲	ShChQIM
6	ラキア	空の拡張	RQIO
7	ヴィロン	帳	VILVN



そして、内周円にはシャマイム(天界)があり、さらに内周に三つの小円があるが、その中央はセベル(球)であり、左右にエデンとゲヘナが配置されている。

パット・ザレウスキーは若干の間違い(ヘブル語の綴り間違い等)は散見されるが、この七大天図に詳細な解説を付している。<sup>(10)</sup>かれは他の図版との関係に基づき、上図を「アッシュヤー界の七大天図」と呼んだ。

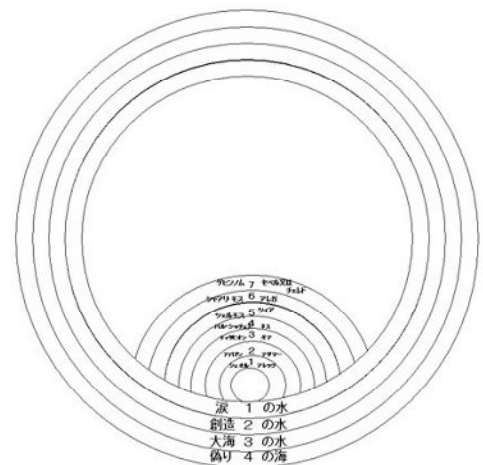
## c 天界の門 第XVI図副図U 「ゲヘナ図」

下なるエデン及び地下のエデンの概念を説明する副図Uの名称は、「七大地獄の館と四大海図」(Septem mansiones inferni & quidem circulo, the Seven infernal mansions and Four Seas)である。しかし、黄金の夜明け団では単に「ゲヘナ図」として知られている。

外周円、すなわち四海には、最初の円のなかに「涙の水」(aquae lachrymantium)があり、第2の円の中には「創造の水」(aquae creationis)があり、第3の円の中には「大海の水」(aquae Oceani)があり、第4の円の中には「偽りの海」(mare falsum)がある。

内部の七円には、右手に七つの地球の名前がある。これを七惑星と混同してはいけない。「七大天」が、創造者の御技を示す七つの純粋な鏡であるとすれば、「七大地」はよりぼやけた、焦点の合わない影である。ある解釈によれば、地球の七大陸を表現するとあるが、現代風に見れば、七つの異次元平面を意味する。

上記の分類は11世紀の文献『ミドラシュ・コーネン』等による。テベルはイエソドに帰属し、われわれが住む世界であるケレドはマルクトに帰属する。<sup>(11)</sup>



(10) Pat Zalewski, *Kabbalah of the Golden Dawn*, St. Paul : Llewellyn Publications, 1993, pp.147-150.

(11) David Godwin, *Godwin's Cabalistic Encyclopedia*, 3rd Edition, St. Paul : Llewellyn Publications, 1994, pp.92f.

1	アレツ	乾き、潰れた大地	AR Tz
2	アダマー	赤みがかった土	ADMH
3	ギア	谷の両側、起伏のある土地	G I A
4	ネシアー	牧草地、草原	N Sh I H
5	ツィアー	砂地の荒れた土地	Tz I H
6	アルクァ	大地	ARQA
7	テベル	土と水の混ぜもの	ThBL
	ケレド	世界	ChLD

図の左手には7つの奥津城がある。

これは七大地獄と呼ばれるもので、闇のセフィロトの顕現である。第1の大地が、最も高次の領域に対応していたのと同様に、第1の地獄は最も深い混沌に属する。この七大地獄はホドに帰属するアルクァに含まれる。<sup>(12)</sup>

1	シェオル	深み	ShAVL
2	アバドン	地獄	ABDVN
3	チタヒオン	死の土	T I T H I V N
4	バル・シャケス	破壊された墓所	BAR ShChTh
5	シャーリ・モス	死の影	ShOR IMVTh
6	ツェル・モス	死の門	TzLMVTh
7	ゲ・ヒンノム	冥界	G I H N V M

それらを総括すると下表に整理される。

	上なるエデン 《七得天》	下なるエデン 《七大地》	地下のエデン 《七大地獄》
三つ組	アラヴォース	アレツ	シェオル
ケセド	マコン	アダマー	アバドン
ゲブラー	マオン	カラバー	バル・シャカス
ティファレト	ゼブル	ツィアー	チタヒオン
ネツァク	シェカキム	ヤバシャー	シャーリー・モス
ホド	ラクィア	アルクァ	ツェル・モス
イエソド	ヴィロン	テベル	ゲ・ヒンノム
←上昇→		—下降→	

物質生命体とエーテル的生命体の住む地球は、中央の七つの「地」で表される。ヘブル語では「天」は、「蒼穹」や「雲」などを意味する単語で表現され、「地獄」は「淵」や「穴」などで示される。その語彙からも、ユダヤ人の感覚で上方が聖なる空間で、下方が俗なるまたは、闇なる空間であることが分かる。この世界が複合次元存在であるという説明は省略して、先に進むと、左側、すなわち「天」と「地」を結ぶのが「ヤコブの梯子」であり、それを往復するのは天使である。むろん、右側、すなわち「地」と「闇」を結ぶプロセスもあり、「闇の梯子」を上下するのは黒天使たちである。天使とは「御使い」という意味であり、文字どおりメッセンジャーである。

(12) "Baraita on the work of creation," in *The Secret Garden*, Station Hills Opening : Barrytown, Ltd, 1998, p5.

### (3) 黒いケルビム

『エゼキエル書』には、《メルカヴァー幻視》と呼ばれる有名な件りがある。

バーラー	ヴァ・ハナー	ルカ	セラー	バー	ミン	ハツァフォン
VARA	VHNH	<u>RVCh</u>	<u>SORH</u>	BAH	MN	HTzPVN
そして見た	見よ	嵐のような風	来たり	より	北方より	
アッ	ガトル	ヴァ・エシュ	ミツラス	ヴァ・ノガ	ラブ	サビブ
<u>ONN</u>	<u>GDVL</u>	<u>VASh</u>	<u>MThLQHTH</u>	VNGH	LV	SBIB
大いなる雲		及び自ら輝く炎		そして輝き	そこに	周り中に

ヴァ・ミカ	ケイン	ハ・カシュマル	ミク	ハ・エシュ
VMThVKH	KOIN	<u>HChShML</u>	MThVK	HASh
そしてその中央には	ような色の	磨いた青銅の	の中央に	炎

「そして、私は見た。見よ、北の方角から、嵐のような風が来たり、大いなる雲と自ら輝く炎がそれを囲み、輝いていた。そしてその中央には磨いた青銅のような色のものが炎の中央にいた。」(『エゼキエル書』1章4節)

『ゾーハルの書』によるこの部分の注解では、《嵐のような風》、《大いなる雲》そして《自ら輝く炎》の三つの現象はクリボトの顕現であるとされる。そしてこれらは三重の障壁となって預言者を阻むが、それを越えたとき《カシュマル》すなわち、「沈黙の(カシュ)声(マル)」が訪れる。この部分の後に《オフアニム》「回転するもの」としての天使が記述され、四方向に向いた生き物の顔を見るときという人間の視野では不可能な幻視に到達する。この回転する輪とともに移動する生き物が《ケルビム》である。そして、遙か上空に垣間見た玉座を《メルカヴァー》と呼ぶ。

さて、四つの生き物で象徴される《ケルビム》は四大の最高統率者である。かれらはひとりひとりが四大の元素特性をもつ四種類の顔を有している。それは諸力のケルブ的表現である。さらに上位を探るとブリアー界においてケルビムを助ける大天使がいるが、それについては既に説明済みである。

かれらの足下に踏みつけられる邪悪な反逆する諸力は、対応する闇の四大であった。この闇の四大を束ねるのが、《黒いケルビム》である。ケルビムを背後から支援するのが闇の大天使、いわゆる《魔王》となる。四ケルビムの足下にある邪悪な反逆の諸力は以下のとおり。<sup>(13)</sup>

←光の宇宙→      →闇の宇宙←

元素	大天使	象徴	闇象徴	闇大天使	闇の王国
火	ミカエル	獅子	獣	リリス	エドム
水	ガブリエル	鷲	蛇	マカロス	メディア
風	ラファエル	人間	驢馬	サマエル	バベル
地	アウリエル	牡牛	去勢牛	ラハブ	ヨニア

リリス : 外見は美しいが、内面は墮落し腐り果てた女性、恐るべき獣の背にのる。

『黙示録』の大いなる獣と娼婦のイメージ。

マカロス : 蛇と女性の融合した姿をもち、さそり蛇の上に乗る。

(13) S.L.MacGregor Mathers, "The Qliphoth of the Qabalah," in *The Sorcerer and His Apprentice*, Wellingborough : The Aquarian Press, 1983, p.25.

サマエル：闇をまとう大天使、愚鈍なる驢馬の上に乗る。  
 ラハブ：その象徴は去勢牛の上で跳ねる恐るべき悪魔。



イブを誘惑するリリス



蛇女マカロス



ラハブ



死天使の姿をとるサマエル

サマエル（盲目の神）の扱いは微妙である。ミカエルを天の大天使、サマエルを破壊の大天使として対比するときは、明らかにクリプト存在ではない。むしろ、反逆天使である魔王たちとは立場が違う神の使徒になる。《死天使》と呼ばれるアズラフェルも同様である。これらは断罪し、裁く《神の左手》なのだ。しかし、サマエルの落とした影が魔王として徘徊している。上記の闇の風のケルブを守護するのはこの影である。

マイモニデスは、サマエル／サタンを神の権能を代表する悪天使であるとし、その象徴的な姿を駱駝のような形態の蛇に乗って顕れると述べている。<sup>(14)</sup>

グノーシス派の伝統では、サマエルはヤルダバアト、すなわち偽創造主たるアルコーンのひとりと混同されている。

『われは神なり、われのほかには神なし』・・・するとひとつの声が上界よりあった。『サマエルよ、おまえは間違っている』<sup>(15)</sup>

この《黒きもの》サマエル（影）が地獄を通過する以前には、明確な「木」の体系は存在せず、現在以上の混沌が闇を支配していた。そのときの三大魔勢力が、《ケマトリエル》、《ベリアル》そして《オチエル》である。かれら《旧支配者》は地獄の至高の三つ組を構成していた。

ケマトリエル：巨大な黒い人頭の竜・蛇で、その下に地獄の逆向きのセフィロトのケテルにつながっている。

ベリアル：黒い高慢な人・竜。かれは神を否定し、逆向きのコクマーに結びついている。

オチエル：またはゴチエルである。巨大な高慢な人・昆虫である。恐るべき体型、かれの幅は長さより大きく、逆向きのビナーに結びついている。

(14) S. ローゼンベルグ『ユダヤ教思想における善と悪』晃洋書房、2003年、63頁。

(15) 「アルコーンの本質」『ナグ・ハマディ文書 I 救済神話』岩波書店、1997年、130頁。

### 3 魔王の座

ここで説明する「闇の木」の体系、特に逆セフィロト及び魔神名については「黄金の夜明け」魔術体系においては、全く触れられていない。

ユダヤのカバラの体系では、悪魔論は異端というより不要と見なされており、研究は一部の偏屈なカバラ修道士の記録に残されているだけである。天使論と悪魔論はむしろ「精神的抑圧傾向の強い」キリスト教の修道院で発達した。

従って、ここに述べた理論は、可能な限り《黄金の夜明け》の象徴体系と合致させてあるが、ある種の実践的検証を経た I : O : S : の見解であることを明言しておく。

#### (1) 逆向きの世界

魔的世界の住人について説明する。混沌の住人たるかれらにも一種の位階制度がある。最も敷延されているのは、逆セフィロトによる十の階級である。《光と闇の四界》については既に9章で紹介したが、今度は逆向きの生命の木について説明しよう。

	逆セフィロト	魔神名	魔王	魔族	影の宇宙
1	無神論 (ハチカル)	シャーマン	サタン	タウミエル	闇の海王星
	בצ'קר	שממון	שטן	ケレティエル	
2	愚鈍 (エイリー)	ラー	ヘルゼブフ	ゴキエル	闇の天王星
	אווילי	ראה	בעלזבוב	オキエル	
3	拒絶 (シェリダー)	ラシャー・ピカール	ルキガス	サタリエル	闇の土星
	סלידה	רשע פגול	לחיפגת	ハラシエル	
4	無感動 (アディッシュ)	ハカール	アシュタロス	ガグ・シケラー	闇の木星
	אדישות	פגור	אשתרות		
5	残酷 (アクセルユス)	クナ・ペガリム	アシュモガイ	ゴラハブ	闇の火星
	אכזריות	כון פגולים	אסמודאי		
6	醜悪 (カイツル)	ラシャー・ハキアー	ヘルフェゴール	ザミエル	闇の太陽
	כיצור	רשע הפנה	בלפגור		
7	色欲 (ツァガブ)	ラシャー・カイル	ハアル	ゲツフィエル	闇の金星
	צגב	רשע חיל	בעל		
8	食欲 (ケムダー)	ペケリ・キラー	アドラマク	サマニエル	闇の水星
	חמדה	פגרי חילה	אדרמלכ		
9	不安定 (アイツアップス)	ラシャース	リス	ナカシエル	闇の月
	איציבות	לעשות	לילית		
10	物質主義 (キムラヌス)	シェリス・ハシェール	ナーマ	オブリエル	闇の地球
	חומרנות	שארית השער	נעמה		

《黄金の夜明け》団の解釈では、これら邪悪な、逆向きのセフィロトは、《邪悪の七宮殿》に含まれる。それは《楽園喪失以前の苑》の図の最下部に赤竜が眠る《穀の王国》として示されていた。三小円と二小円を含む七つの円で示されたその図は、《七大地獄》とも呼ばれる。

これらのセフィロトは、聖なるアッシュヤー界の背後に独自の場所を占めている。

黒きサマエルは、今や10ではなく11となった悪の全セフィロトを包み込む。11はクリポトの数である。同じく11はダースの数でもある。ダースは、虚のセフィラであり、エネルギーがその性質を変換する場所である。

第11の文字を暗示する言葉がある。「大臣」(『エステル記』9章3)、「ホレブから11日の」(『神命記』1章2)、言葉「どこにいるか」(『神命記』32章37)などは11の数字を持つ。11はエバルの呪いである。11はエドムの領主であるなどと言われる。

## (2) 十大魔王

### a 魔王サタン

#### 第1の逆セフィロト (バチカル。闇のケテル)

第1の魔王はサタンである。

ヘブル語ではサタン (שָׂטָן) アラム語ではサタナ (ܫܬܢܐ)、ギリシャ語ではサタナス (Σατανῶς)、またはサタン (Σαταν) と呼ばれ、その他の言語においても類似の発音で呼ばれる。サタンの語源は、「敵対する」、「非難する」である。

カナン神話では、毛むくじゃらの山羊のような姿の神セイリンである。<sup>(16)</sup>

サタンの位置づけは難しい。『旧約聖書』における多くの場所でサタンは神の命令を受け、その試練を下すという機能をもつ天使、神の息子のひとりとして現れる (『ヨブ記』ほか)。

カスティリヤ学派においては、神の権能のひとつとして懲罰を代行する天使を想定した。神の光を取り上げることは最大の懲罰である。「主はかれらから光を取り上げ、闇が残り汚れし者を罰した。」 (『マセケト・アツィルト』<sup>(17)</sup>)

そして、この権能は「審判の帰属」 (שִׁפְטָה מִדָּאסִי מִדָּאסִי מִדָּאסִי ミダス・ハ・ジン) と呼ばれ、その執行者はサタンであるとされた。<sup>(18)</sup>

サタンは『第2エノク書』または『スラブ語版エノク書』(31:3) においては、神の規範に背いたエグレゴレの天使長サタナエルとして現れる (『第1エノク書』における天使長はシェミハザである。)

しばしば、サマエルと同一視され、人間の「悪への衝動」を試す者として現れる。

カバラにおいては、アマレク、ゴリアス、ハマンなどの敵対的勢力と同一視され、クリポトの魔王とされてきた。

伝統的な解釈においては、唯物論的な闇の王、寒冷の支配者、敵対者 (シャタナ) である。ドレの挿絵が、サタンを最も的確に描写している。裸形の巨人として現れ、その下半身は万年氷河のなかに閉じ込められている。



魔王の外観というものは、人間に限られた想像力により見る姿であるため、サタンを強い力もつ反抗の天使と捕らえるならば、右図のように美しい姿で表現される。

しかし、一方、腐敗と邪悪の極北に位置する万物を否定する霊的存在、人類の天敵と考えるならば、左図のような醜い姿で出現するだろう。



しかし、どちらもサタンという複雑な魔王のある位相を示したものにすぎない。

サタンについては、ルシファーとの関連も問題になるが、基本的にはルシファーとは異なる霊的存在である。

(16) Rivkah Scharf Lluger, *Satan in Old Testament*, Zurich : Zurich University, 1955, pp.43-44.

(17) Gershom Scholem, *On the Mystical Shape of the Godhead*, New York : Schocken Books, 1991, p.63, p.281n.

(18) Op.cit., p.63.

## b 魔王ベールゼブブ

### 第2の逆セフィロト（エーイーリー。闇のコクマー）

第2の魔王はベールゼブブ、有名な「蠅の王（dominus muscarum）」である。

その原型となったバアル・ゼブブ（𐤁𐤏𐤃𐤁𐤏𐤅𐤁𐤏）とは、『旧約聖書』によれば、パレスティナ地方の都邑エクロンにおいて信仰されていた神の名前である。「バアル」とは「エル」と同様に、当時の神の一般名詞であったため、バアル・ゼブブとは「ゼブブの神」という意味である。「ゼブブの神」とは、忘れられたゼブブという地の神なのか、ヘブル語の「蠅（ゼブブ。𐤁𐤏𐤃𐤁𐤏𐤅𐤁𐤏）」（語幹は、𐤁𐤏𐤃𐤁𐤏𐤅𐤁𐤏（ざわめくこと））から、「蠅の主」という意味なのか断定することはできない。

ただし、この「蠅の王」の力は明確である。それは蠅のもたらす疫病を駆逐し、或いは加速する畏るべき神である。この力は当時の神々の最大の武器である。出エジプトにおいて、預言者モーシェは、神癒の奇蹟を行うとともに、敵に疫病を送る力を持っていた。<sup>(19)</sup>

『旧約聖書』では次のように物語られる。

「アハブが死んだあとモアブはイスラエルに背いた。

・・・『エクロンの神バアル・ゼブブ（𐤁𐤏𐤃𐤁𐤏𐤅𐤁𐤏）に、この病気がなおるかどうかが尋ねよ。』・・・

主（𐤁𐤏𐤃𐤁𐤏𐤅𐤁𐤏）はこう仰せになります。

『あなたはエクロンの神バアル・ゼブブに尋ねようと使者を遣わしたが、それはイスラエルに、その言葉を求めるべき神がないためであるか。それ故にあなたは登った寝台から降りることなく、必ず死ぬであろう。』  
（『列王記 下』(1:2, 3, 6, 16)）

アハブ王の子、アハジヤ王は高殿の欄干から落ちて病気になったためバアル・ゼブブ神にその治療法を尋ねようと使者を差し向けるが、主の命を受けた預言者エリヤに使者を阻止された。王は怒り、エリヤに審問の兵士を差し向けるが2度までも、その軍隊は主の火により焼き尽くされる。3度目に差し向けられた五十人長はエリヤに懇願し、主の命令により、エリヤは五十人長とともにアハジヤ王に面会し、神託を伝え、王は死ぬ。

アハジヤ王は異教に毒されていたが、神の力を一種の感染魔術として捕らえたようである。王の命令でエリヤが下れば預言者エリヤの神聖な力は喪失すると。しかし、残念ながら将校の懇願を契機に主ヤーウェの命令が下り、致命的な主の（呪力をもつ）言葉を王に伝達する。当然ながら、その結果として王は死ぬのである。



一方、『新約聖書』においては、微妙に名前が異なるベルゼブルとして現れる。

イエスの弟子に対する説話のくだりでは、

「・・・もし、家の主人がベルゼブルといわれるなら、その家のものどもは尚更、どんなにか悪く言われるであろう。」（『マタイによる福音書』(10:25)）

イエスの悪霊落としを見て非難する人々との対話においては、

「この人が悪霊を追い出しているのは全く悪霊の頭ベルゼブルによるものだ。・・・」

(19) マックス・ウェーバー『古代ユダヤ教』みすず書房、1985年（新装版）、248、256頁。

もし、わたしがベルゼブルにより悪霊を追い出すとすれば、・・・」

(『マタイによる福音書』(12:24, 27))

「かれはベルゼブルに取り憑かれている。」(『マルコによる福音書』(3:22))

そして『ルカによる福音書』(11:15, 18, 19)においても同様にベルゼブルと語られる。

ここで問題が生じる。バアル・ゼブブとベルゼブルは同じ霊的存在なのか、もし、そうであれば何故、別の言葉で語られるのか？

『旧約聖書』(ヘブル語原典)の最初のギリシャ語訳である『七十人訳聖書』においては、ヘブル語の「バアル・ゼブブ」を、A版においては「バアルゼブブ (Baalzeboub)」、B版においては「バアルミィアン (蠅のバアル)」と訳している。

ラテン語訳の『ヴルガダ』では「アカロンの神ベルゼブブ (Beelzebub deum Acaron)」と訳している。<sup>(20)</sup>

このラテン語訳から英語に翻訳された『ジェームズ王版聖書』においても、旧約聖書の部分では「エクロンEkronの神バアル・ゼブブ (Baal-zebub the god of Ekron)」とあり、おもしろいことに新訳聖書の該当項の記述においては、「ベルゼブブ (Beelzebub)」と訳している。



それでは『新訳聖書』にあるベルゼブルとは何か？

ヘブル語のゼブル (זְבוּל) とは、一般に「汚物、芥、残飯、堆肥」などを意味する語感のよくない単語である。しかし、『旧約聖書』においては、ソロモン王が神殿を建立したとき、その神殿を指して「ベト・ゼブル (בֵּית זְבוּל)」つまり「高き家」と奏上した(『列王記 上』(8:13))。

「ゼブル (זְבוּל)」または、「ゼブル (זְבוּל)」には、「住むこと」、「(主の) 住まい」という意味もある。

また、カバラ的宇宙観においては、「ゼブル (זְבוּל)」とは、七天天のうち第四天の名前である。

従って、後者の意味を取ると、バアル・ゼブルとは「高き家の主」となる。ベイト・ゼブルからベイトが抜けるのは、バアル・ペオルなどの先例がある。しかしながら、神を物の名前に関連づけるのは議論を呼ぶところである。

イエス時代のユダヤ人が、バアル・ゼブブをバアル・ゼブルと呼んでいたか否かについては、資料がなく判断できない。従って、『新約聖書』における「ベルゼブブ」という単語は、『旧約聖書』の「ベイト・ゼブル」を参照したのではなく、単なる音声異化作用と思われる。

長々と聖書史学を論じたが、バアル・ゼブブ (Baalzebub)、ベルゼブブ (Berzebub)、ベルゼブス (Berzebuth) と呼ばれた霊的存在は、かつてカナン人の神であり、その存在が時代に適合せず、或いは征服者イスラエルの神話体系に同化されて魔王に転じた霊である。

バアルは主神エルに倣って牡牛に変身することがあった。魔王ベルゼブブは、変形した牡牛、尾長山羊、そして最も多く巨大な蠅の姿で現れる。

(20) Liber Malachim, IV Rg1, 2-16, BIBLIA SACRA IUXTA VULGATAM VERSIONEM, Stuttgart : Deutsche Bibelgesellschaft, 1983, p.502f.



### c 魔王ルキフグス

#### 第3の逆セフィロト（シェリダー。闇のビナー）

第3の魔王はルキフグス（Lucifugus）である。

この魔王は『大魔術書（The Grand Grimoire）』などに、富を与える魔物ルキフグス・ロフォカルス（Lucifuge Rofocale）として描かれ非常に有名になった。日本では、最初は『大魔術書』の異本<sup>(21)</sup>である『赤竜』に出てくる悪魔として紹介された。<sup>(22)</sup>

この魔王のヘブル語名は、**לוציפון** である。

ただし、『旧約聖書』や聖書外典偽典においては、この名前が出てこない。前述した『大魔術書』などの偽中世の魔術書において、ルシファーの眷属、地獄の魔王のひとりとして翻案された存在であるからだ。



興味深いことにルキフグス（luci-fugus）とは、ラテン語で「光を嫌う者」という意味である。従って、「暁の明星（lucifer）」とは対極に位置するはずなのだ。



ルキフグスは、山羊の下半身をもつ魔物の姿で現れる。

財宝を野山に隠して、人間の欲望を叶えるという、ある意味ありがたい魔王であるが、この稚拙な絵のなかにも、欲望の支配者としての禍々しい位相が現れている。

『赤竜』によると、ルキフグスを喚起して、靈魂の代価を得るのは実に簡単であることから、モラル・ハザードをもたらす魔王でもある。



(21) 『大魔術書』の異本は、1612年のイタリア語版、1823年のフランス語版（書籍の奥付には1521年の偽年号）などがある。部分的に紹介された版に『赤竜』、『黒鷄』などの小冊子が多数出版されている。

(22) "Le Dragon Rouge," in *Grimoires et Rituels Magiques*, Paris : Editions Pierre Belfond, 1972, pp.116f.

## d 魔王アシュタロス

### 第4の逆セフィロト（アディシュース。闇のケセド）

第4の魔王は、アシュタロス（**אשטרוט**）である。アシュタロスは男性形の魔王であるが、女神アシュタルテの逆転形と考えられる。

発音の近いアシュトレス（**אשתרות**）は、ユダヤ人に縁深い中東古代の女神アシェラー（**אשרה**）を意味する言葉である。

アシェラーの名前は紀元前1745年のシュメール時代に母神として出現する。シュメール・アッカド文明のあとも、アシェラーはすべての神々を産む母神として現れる。

紀元前14世紀頃の地中海北東部のウガリット地方で使用されていた石版からは、天空神エルの配偶者たる女神「大海の貴婦人アシェラー」という記述が読みとれる。アシェラーはバアル神、アナト女神など多数のウガリット神群を出産する。



ロゼッティ、シリアのアシュタルテ

アシェラーの娘が女神アナトまたはアシュタルテである。母親と娘は神格としては、相互に交代可能であり、しばしば、同一視された。



ウガリット出土のアシェラー像  
(紀元前14世紀、ルーブル美術館)

処女アナト、いと高き諸天の女神とも呼ばれる女神アナトは植民地カルタゴにおいては、女神タンニトと同一視された。

女神タンニトは、天空の処女神（Virgo Caelestis）とも呼称される。その名前の由来は、「蛇の神」であり、龍女神を意味する。女神アシェラーの古き別称ラビトゥは、獅子女神という意味であり、「獣の貴婦人」及び「天の処女神」として、アシェラー、アナト、タンニトは、



カハ石盤、クドゥシュ女神  
(エジプト第19王朝、大英博物館)

ひとつの女神とされる。<sup>(23)</sup>

そして、ウガリット及びエジプトにおいては、神聖なる女神クドゥシュとも呼ばれた。クドゥシュは蛇を手にして獅子の上に立つ女神である。エジプトから出土した石盤の解析により、クドゥシュ＝アシュタルテ＝アナト仮説は早期に唱えられている。<sup>(24)</sup>

ユダヤ人が進出したカナンにおいては、カナンの主神バアルの妻として崇拝されていた。イスラエルにバアル／アシェラー信仰が入ったのは、アハブ王の治世の下であるとされる。シドン人の王妃が持ち込んだ信仰は、「バアルの預言者450人及びアシェラーの預言者400人」（『列王記 上』18:19）を数えるまでに成長した。

アシェラーについては、興味深い記述が『旧約聖書』にある。

(23) クロス、前掲書、84-87頁

(24) Judith M. Hadley, *The Cult of Asherah in Ancient Israel and Judah*, Cambridge : Cambridge University Press, 2000, p.8.

「エフライムよ、わたしが偶像と何のかかわりがあるか。

あなたに答え、あなたに顧みる者はわたしである。

( 'יְנִי וְאֵשֶׁרָה 'יְנִי 'יְנִי )」(ヘブル語『ホセア書』14:9 共同訳では14:8)

ある研究家がこの部分は、次のように読み替えられると仮説を提示した。

「わたし(主)は、かれ(エフライム)のアナトであり、アシェラーである。

( אֵשֶׁרָה וְאֵת 'יְנִי )」

つまり、当時のアシェラー信仰は、ヤーウェの神聖なる配偶者と見なされるほど浸透していたという意味になる。<sup>(25)</sup>

アーサー・フレデリック・イデ博士は、さらに一步を進めて、ヤーウェ神とアシェラー女神はギリシャ神話の神々のように性行為により、アダムとイブを産んだと解釈する。族長時代の霊的存在が人間と性行為の末、雑種の巨人族を産んだ伝説は『エノク書』などで著名であるが、ヤーウェはさらに娘イブと交わりカインを産ませたと説明した。<sup>(26)</sup>

「わたしは主により子をもうけた。」(『創世記』4章1)



紀元前4世紀頃、都邑シドンの主神がアシェラーからアシュタルテに移行した。アシュタルテ(複数形:アシュタロス)の名前は、『旧約聖書』に9回記載されている。

魔王アシュタロスは、古代のアシュタルテ信仰が男性形の霊的姿形に逆転した存在である。

アシュタルテは豊穡の神であり、動物たちの繁殖を司る女神でもあった。クリポトにおける魔王アシュタロスの姿は、その戯画化された風貌をまとう。

白と黒の衣装を纏い人間の姿で現れるが、ときには驢馬の姿を取ることもある。左図のように裸形で、獣の上に跨る場合も

ある。

(25) Raphael Patai, *The Hebrew Goddess*, Detroit : Wayne State university Press, 1990, p.53.

(26) Arther Frederick Ide, *Yahweh's Wife : Sex in the Evolution of Monotheism*, Monument Press : Las Colinas, 1991, p.23.

## e 魔王アスモダイ 第5の逆セフィロト（アクゼリユース。闇のゲブラー）

第5の魔王はアスモダイ（**אשמודין**）である。

クロウリーは、アシュモダイ（**אשמודין**）と呼んだ。

古代ペルシアでは、『アヴェスタ』において、アーリマンの指揮下にある魔軍の総大将エシュマ、または、エシュマ・デヴァ（*Ashma-dæva*）として君臨した。このエシュマという名前は、「欲望を感じる」、「欲望を満たす」、「怒る」という意味の単語イシュと結びついている。従って、かれに与えられた任務は、人間に怒りの情、情欲などを喚起し、復讐に駆り立てることである。



聖書文学におけるアスモデウスは『トビト書』に現れる。アスモデウス（*Ασμοδαίος*）は、娘サラに懸想して婚姻の初夜の床で七度、サラの新郎を殺害する。しかし、最後にサラと結婚したトビアスがラファエルの助けを借りて打ち負かすのである。

タルムードにおいては、アシュメダイ（**אשמודין**）と呼ばれた。あるタルムード伝承ではアシュメダイは悪魔たちの王であり、リリスの配偶者とされる。<sup>(27)</sup>

別の伝承では、カインの血脈を伝える武器作成者トバル・カインとその妹ナアマの間で来た近親相姦の息子である。

複雑なので言語間の変遷を整理すると、アシュメ（**אשמו**）とアシュモ（*Ασμο*）がエシュマ（*AEshma*）に対応し、ダイ（**דין**）とダイオス（*δαίος*）がデーバ（*dev*）に対応する。

アスモダイは、有翼の天使であり、未来の知識を有すると言われる。しかし、良く知られているのは、次の邪悪な位相であろう。

魔王アスモダイは、三つの頭をもつ王の姿で現れる。頭部は、牡牛、人間、羊の3種類である。鷲鳥の足を持ち、蛇の尻尾を垂らし、口から炎を吐く。

かれは竜に騎乗して現れる。

(27) Howard Schwartz, *Lilith's Cave: Jewish tales of the supernatural*, San Francisco: Harper & Row, 1988, p.8.

## f 魔王ベルフェゴール

### 第6の逆セフィロト（カイツール。闇のティファレト）

第6の魔王はベルフェゴール（Belphegor）である。

ヘブル語名は、バアル・ペオル（**באל פועל**）である。『旧約聖書』によれば、モアブの地ミデアン人の住む土地がペオルと呼ばれた。従って、バアル・ペオルは「ペオルの神」という意味になる。『70人訳聖書』ではベルフェゴール（Beelphegor）と訳された。

「イスラエルはシツテムにとどまっていたが民はモアブの娘たちと淫らなことをし始めた。・・・イスラエルはこうしてペオルのバアルにつきしたがったので、主はイスラエルにむかって怒りを発せられた。・・・」

（『民数記』(25:1-15)）

このとき、ヤーウェは異端信仰に走る民を戒めるため疫病を送り、イスラエル人から2万4千人の生命を刈り取った。その後、死亡した民の報復として、モアブの地にあるミデアン人の女を殺させた。



「ミデアン人を打ち悩ませなさい。

かれらはたくらみをもって、あなたがたを悩まし、ペオルのことと、・・・すなわちペオルのことで、・・・」

（『民数記』(25:17-18)）

さらに、31章において、ミデアン人の征服が語られる。男子を皆殺しにし、女子供を奴隷にする悲惨な戦争である。当時の資源収奪戦争の残酷さは、現代とは比較できないが、それにも増して過酷な捕虜虐殺がはかられる。

「彼らはバラムのはかりごとによって、イスラエル人にペオルのことで罪を犯させ・・・」

（『民数記』(31:16)）

理由にならない理由を付して、捕虜のうち男子の子供と非処女の女性をすべて殺害させた。陰惨な民族浄化が実施される。

「しかし、おまえはヨシュアに命じ、・・・こうしてわれわれはベテペオルに対する谷にとどまっていた。」（『申命記』(3:28-29)）

「ペオルで犯した罪でまだ足りないというのか・・・」（『ヨシュア記』(22:17)）

「・・・ところが彼らはバアル・ペオルへ行き、身をバアルにゆだね、彼らが愛したものと同じように憎むべき者となった。」（『ホセア書』(9:10)）

「また、彼らはペオルのバアルを慕って、死んだ者に捧げた、生け贄を食べた。」（『詩篇』(106:28)）

その後も執拗なほどバアル・ペオルのことが語られる。

大量の人血を飲んだ魔王ベルフェゴールは年老いた鬼神の姿で表現される。

## g 魔王バアル

### 第7の逆セフィロト（ツァーガブ。闇のネツァク）

第7の魔王はバアル（**בל**）である。

古代ウガリットのラス・エシュ・シヤムラから紀元前14世紀頃の大量のカナン語楔形文字が出土して以来、カナン神話に対する研究は促進された。それ以前は聖書に書かれたバアルとカナン神話のバアルが同一であるとの確信もなかったのである。<sup>(28)</sup>

ウガリット文献の中でバアル神による創世神話が語られる。バアル神は、混沌の力を表象する海神ヤムと戦い、冥府の死者の王モートと戦い、七頭の蛇神ツィルヤト（テュフオエウス）と戦い、これらの無秩序な諸力を悉く討ち滅ぼす。その後、神々の長老エールは、神々の王バアルの即位を宣言し、その座を北方のツァフォン（ゼフォン）山に置く。<sup>(29)</sup>

ウガリット文献は、カナン神群に王制度が成立する過程を、描写している。

カナン神話においては、バアル神とバアラト（またはバアラ）女神が対の神として信仰された。カナン語で、バアル＝主君、王、バアラト＝貴婦人、王妃、という意味である。固有の神を示す場合を除き、一般名詞では「神」と「女神」に該当する。

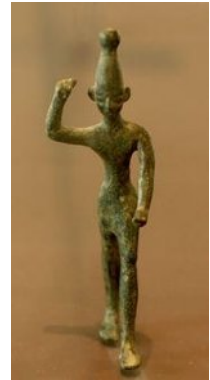
たとえば、港湾都市テュロスの守護神メルカトは、バアル・テュロスと呼ばれた（『列王記上』16章31）。同じくバアル・シヤマイム（天空のバアル）とは、ハダド神のことである。植民地カルタゴにおける最高神は、バアル・ハモーンと呼ばれた。ハモーンの意味はさだかではないが、ギリシャ神話のクロノス神、ローマ神話のサトルヌス神と同一視されている。カルタゴを含む北部アフリカにおいては、バアル・ハモーン神は「雄羊」の属性をもち、バアル・カルナイム（2本の角をもつバアル）と呼ばれた。

豊穡をあらわす雄羊や牡牛を神の象徴として偶像化することは、カナン神話の影響を受けた中東全域に普及していた。北イスラエルにおいて、ヤーウエの聖所にも金箔を施された牡牛の像があった。ある時代において、バアル・ヤーウエ混合宗教が存在した。<sup>(30)</sup>

カナン神話においては、バアル神はダゴン神とダグヌー女神の息子であり、冬の嵐、春の霧及び夏の露を生み、作物を育てる嵐の支配者である。大地の豊穡の統制者であるバアルは、雲の乗り手、地の王（ヘブル語ではメレク・ハ・アレツ）とも呼ばれた。

さらに、バアル神はバビロニアのベル神、アッカドのハダド神（アダド神）と同一視された。

バアル神の最大の特徴は嵐神としての性格であり、ツフォン山の神殿から嵐雲として雷鳴のごとき声、「バアルの声（**קול בעל** コル・バアル）」を響かせる。それは父なる神としてのエールが、エール山の神々の議会から布告としての命令を伝えるのとは対照的である。<sup>(31)</sup>



バアル神像

（前14世紀、ルーブル美術館）



獣頭のバアル・アダド神の石碑



神々の王バアルの神像

(28) Judith M. Hadley, *The Cult of Asherah in Ancient Israel and Judah*, Cambridge : Cambridge University Press, 2000, p.4.

(29) ニール・フォーサイス『古代悪魔学』法政大学出版局、2001年、55-85頁。

(30) ウェーバー、前掲書、257-259頁。

(31) クロス、前掲書、240、248頁

カナン神話群は、中期青銅器時代（紀元前19～16世紀）に口承形式の原型が成立したと考えられているが、その影響を発達途上のユダヤ教は積極的に吸収した。

『詩編』29章は、古代の「バアル賛歌」の焼き直しであることが判明している。<sup>(32)</sup>

また、エジプト脱出行においてユダヤの民の脱出路を昼夜を問わず先導した「火と雲の柱（ $\text{אֵשׁ וָעַנַן}$ ）」（『出エジプト記』14章24）とは、「火の柱」と「雲の柱」の2本だと理解されているが、実際には「嵐神」の顕現を示す「黒く火を孕む雲」のことであった。ユダヤの民をエジプトから脱出させたのは、宇宙的な力を体現し、天の神として嵐を操る戦神のバアルと類似する性格を色濃く残した初期のヤーウェであった。<sup>(33)</sup>

ヤーウェは戦神としてユダヤ人と契約し、導いた。しかし、征服民族としてユダヤ人がカナンに定住したとき、被征服民の神々は抹殺されたりしなかった。異民族の神々は生活のなかで共存したのである。

前述した嵐神としてのバアルの性格はヤーウェに伝承された。

そして、天の神であるバアルのもうひとつの顔、その地方の土地に根付いた農耕神としての性格から生まれた祭儀がある。それは土地の初物、初子の犠牲を捧げることである。土地を支配するバアルは、その土地のすべての農業生産物の初穂、家畜の初子、そして人間の長子を犠牲として求めた。<sup>(34)</sup>そして、ヤーウェも同様の祭儀で祭られた。

紀元前10世紀頃までは『旧約聖書』のJ資料群にバアル賛歌ほかのカナン神話の顕著な影響が認められた。しかし、紀元前9世紀頃に転機が訪れる。

バアル信仰の影響が強くなり過ぎたのである。聖書の記述によれば、アハブ王の治世下にバアル信仰は「バアルの預言者450人」を数えるまでに成長した。民衆たちは、王室に倣い豊穡の神であるバアルを信仰した。「黄金の子牛」像の逸話は、バアル・ハダド神の豊穡神としての神格を表している。<sup>(35)</sup>

民衆にはバアル神の方が遙かに判りやすかった。このままでは、ヤーウェはカナンの多神教のなかのありふれたひとつの神に貶められる恐れが生まれた。<sup>(36)</sup>

紀元前9世紀から約200年にわたり、ユダヤ教の預言者たちと神官は、バアル神の嵐神的特徴をヤーウェから除くことに苦慮する。人身御供を伴うバアルへの供犠を邪悪と断定し、排撃に努めた。その急先鋒が預言者エリヤであった。<sup>(37)</sup>

エリヤは決死の思いでカルメル山においてバアル、アシェラー神との宗門対決を行う。

エリヤは迷う民衆に向かい「ヤーウェが神であるならヤーウェに、バアルが神であるならバアルに従え。」と宣告し、モーシエの古式に倣い契約締結の神聖魔術的儀式を執行し、バアル神の神官団に勝ち、かれらを毆殺する（『列王記 上』18章20-40）。

そして、荒野に彷徨うエリヤの前に、主はこれまでとは違う特殊な顕現を行う。

つまり、「風のなかにおらず、地震のなかには居らず、火のなかには居らず」と嵐神の顕現形式を否定し、「静かな細い声（ $\text{קוֹל דְּמַמָּה דַקָּה}$ ）」として現れる（『列王記 上』19章11-12）。このシナイ山における2度目の啓示により、ヤーウェ神の性格の再定義が確認できるのである。

(32) クロス、前掲書、203、204、409頁。

(33) クロス、前掲書、215～219頁。

(34) ウェーバー、前掲書、248-249頁。

(35) Ephraim Stern, *Archaeology of the Land of the Bible*, New York : Doubleday, 2001, p.55.

(36) クロス、前掲書、245頁。

(37) Raphael Patai, *The Hebrew Goddess*, Detroit : Wayne State University Press, 1990, pp.42-46.

エリアーデによれば、ヘブライ人は比較的平穏な時代には現世利益を約束するバアルなどの生命と豊穡の神に頼るが、歴史的な破局、危機に直面すると救済を行う宇宙神に復帰したと言う。<sup>(38)</sup>

その結果、宇宙的なリズムを司る「生殖の神」は、邪悪な、劣位の邪霊とされる。そして、バアル神の末路は徹底した卑俗化である。

魔王バアルは、猫、人間、蛙の三つの頭をもち、肥大した腹に蜘蛛の脚をもつ醜い姿で描写される。



---

(38) ミルチャ・エリアーデ『聖と俗』法政大学出版局、1969年、117-119頁。



## h 魔王アドラマレク

### 第8の逆セフィロト（ケムダー。闇のホド）

第8の魔王はアドラマレク（ $\aleph \aleph \aleph \aleph$ ）である。

聖書によれば、「セパルワイムの住人は子供を火に焼いて神アドラマレク（ $\aleph \aleph \aleph \aleph$ ）と神アナンメレク（ $\aleph \aleph \aleph$ ）に捧げた。」（『列王記 下』17章31）このセパルワイムは、バビロニアの都市シッパルのヘブル語名だと言われている。アッシリヤ王サルゴンが、シッパルの非ユダヤ人をサマリヤに強制移住させたため、人身御供を行う外国人の風習がユダヤでも行われたのであると説明されている。

しかし、アドラマレクという名前の神は、バビロニアやアッシリアの神話には存在しない。

そこで、アドラマレクは、アダル・マリク（ $\aleph \aleph + \aleph \aleph$ ）、アナンメレクは、アヌー・マリク（ $\aleph + \aleph \aleph$ ）であり、マリクまたはメレクとはヘブル語の「王」であることから、バアル・アダル、バアル・アヌーと位置づける者もあった。

確かに、西セム語族の神話体系のなかでアダル神（アダド神、ハダド神と同義）は嵐神であり、その父神アヌー（ベル神）は天空神である。しかし、バビロニアの都市シッパルの神は太陽神シャマシュであり、シャマシュ神の異名に、アダルやアヌーは該当しない。

そのため、シッパルとされた地名は、シャルマネザル2世に滅ぼされた都市シャバリムの誤りであり、聖書に記述されたシリア地方ダマスカス近郊の都市シブレイム（『エゼキエル書』47章16）であるという仮説もある。この仮説によれば、シリア地方における人身御供の祭儀は広く知れ渡っており、その点では符合する。一方、アドラマレクという神名は、シリア地方にはない。この地ではアダル神は信仰されていなかった。しかし、一般的な神の名前となるアダル・バアル（アダル・メレクと同義）がこれに該当するというバウディシンの説もあり、<sup>(39)</sup> 決定的ではない。

しかし、シンガー及びバートンはさらに意欲的な仮説を唱えている。

アモン人の信仰したモロク（ $\aleph \aleph$ ）の語源はメレク（ $\aleph \aleph$ ）である。

聖書によれば、モロク信仰はアモン人が紀元前7世紀にユダヤ社会に導入した。その特徴は子供を人身御供にすることである。犠牲になる子供たちは、2本の炎の線の間をモロク神に向け行進し、殺害され、焼かれる（『イザヤ書』42章5、『エレミア書』19章5）。

しかし、聖書の別の部分では、子供の犠牲を捧げた対象はヤーウェ（ $\aleph \aleph \aleph$ ）である（『エレミア書』7章31、『エゼキエル書』20章25-26）。

エレミアは主は命令していないと付記しているが、エゼキエルにおいては犠牲は「われがヤーウェ（ $\aleph \aleph \aleph$ ）であることを知らしめるため」と記述されている。

古代ユダヤの宗教的土壌の中には、初子を神に捧げる畏るべき風習が存在した。子供を犠牲にする祭儀はフェニキア人のマリク・バアル・クロノス信仰が著名であり、モロク／メレク信仰はフェニキア人の影響によるものと推察される。そして、この犠牲はユダヤの神殿のなかではなく、ヒンノムの谷にあるタペス（トペス）と呼ばれる地で行われた。

しかし、最終的にはユダヤ教の体系化と純化のなかで、預言者たちは、その習慣を忌むべ



子供を犠牲に捧げる図柄のバビロニア円筒印章

(39) Wolf Wilhelm Grafen Baudissin, *Studien zur semitischen Religionsgeschichte*, Vol.1, Berlin : Reimer, 1911, p.312.

きものとして封印した。

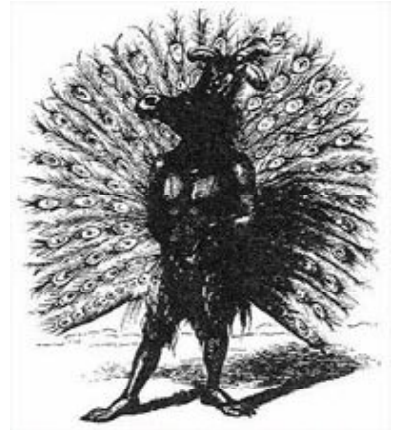
過度期の状況を示すものとして、『ヨブ記』における記述でも、主が代替の犠牲を用意するまでは、ヨブは子供を犠牲にすることを覚悟していたことを想起されたい。同様に、この精神の葛藤を示す言葉がある。

「わが罪のためにわが長子を捧ぐべきか。わが魂の罪のためにわが身の子を捧ぐべきか。」(『ミカ書』6章7)

そして、児童の犠牲という原始的な主(メレク)への祭儀は、邪神モロクの行いに転嫁され。異教徒の邪悪な信仰として整理された。

この文脈でアドラマレクを捕らえると、ユダヤ教の封印した過去、抑圧された貪る神への恐れが魔王アドラマレクに体现しているとも言える。

魔王アドラマレクの姿は、毒を吐く孔雀、または驢馬の姿をもつ。



## i 魔王リリス

### 第9の逆セフィロト（アイーツアツプス。闇のイエソド）

第9の魔王はリリス (לילית) である。

バビロニアの女神アルダー・リリトゥ。

リリスは、きわめて多彩な伝説をもつ女神だが、その出目はシュメール神話である。

シュメール語では、「リル (Lil)」は「風」を意味する。神エンリルは、「風 (lil) の王 (en)」の謂である。リリスに関する最も古い記述は、シュメール語の「リリ」(複数形：リリトゥ)は、「霊」と同じ意味に定義されている。多くの古代文明において、「風」と「息」は同じものであり、これに「霊」も含まれた。

「スピリトゥス」なる単語はその典型であり、ヘブル語の「ルアク」も同様である。故にリリトゥは、ある種のダイモンであるとともに、一般的には「霊」を意味した。

しかし、ユダヤの神話体系に取り込まれたときから、リリスの性質は邪悪なものに重点が置かれるようになった。



獣の貴婦人リリス  
紀元前2000年頃のテラコッタ

曰く、原初の蛇、誘惑者であり、アダムの最初の妻であり、後にアダムと交わり半人半妖の種族を生んだとされる。一般に妖艶な女性か、蛇の半身をもつ女怪物として現れる。

『ベン・シラのアルファベット』によれば、アダムとリリスは性交時にどちらが下になるかで争った。リリスは地に生まれた者としてアダムと同等であると主張し、下になることを肯んぜず、喧嘩別れの末に空に飛び去った。<sup>(40)</sup>

アダムの懇願を受け主は3人の天使を説得に送ったが、リリスは反発し、赤子を病気にするという呪いを放つ。それを阻止するためには、3人の天使の名前または形姿を刻んだ護符があれば、それを阻止できると決定し、彼女は単なる被造物の女性から女怪になった。



天使存在リリスは「誘惑者」または「誘惑者を助ける存在」である。

エデンの苑において、サマエルは天使存在としてのすべてのレベルを顕現し、邪悪の蛇であるリリスに乗って、誘惑の舞台を整えた。<sup>(41)</sup>

貪る神としてのヤーウェの機能を代表する悪天使サマエルとリリスの組み合わせは随所で語られる。ラビ・シモンは、「海の大いなる獣と水に群がるすべての動く生き物」(『創世記』1章21)を解釈し、レヴィアタンとその連れ合い、つまり、クリポトの男性原理サマエルと女性原理リリスのことであると説明した。<sup>(42)</sup> 古代の伝承においてはサマエルは特別な地位に

(40) カナンの宗教的な慣習では、基本的に男女の性行為における差別が少なく、男女平等が貫かれていた。カナンの女性は、処女喪失のときを除き、性交中に男性に組み敷かれること、つまり正常位での性交を好まなかった。その代わり、ギリシャ人やシュメール人の女性のように、口腔性交、または肛門性交を行うとき(男性優位の正常位のみ認められたユダヤ教祭祀階級を支配したレビ族によれば忌むべき行為である。)を除けば、男性に女性が跨る騎乗位で性交した (Frederick Ide, op. cit., p.13.)。

(41) Isaiah Tishby, *The Wisdom of the Zohar*, Volume II, Oxford : Oxford University Press, 1989, p.479.

(42) Op. cit., p.501.

あった。誘惑者、懲罰者としてサマエルは魂、リリスは肉体であるとも言われる。サマエルの機能はリリスを通して働くと考えられたからだ。

リリスがひとりの魔王存在ではなく、悪魔的女性原理の集合体として認識されるときは、リリスの複数形リロス (לִּיְרוֹס) が用いられる場合がある。<sup>(43)</sup>  
また、海の大いなる獣の配偶者に擬せられることから、海魔の姿で表現される。<sup>(44)</sup>

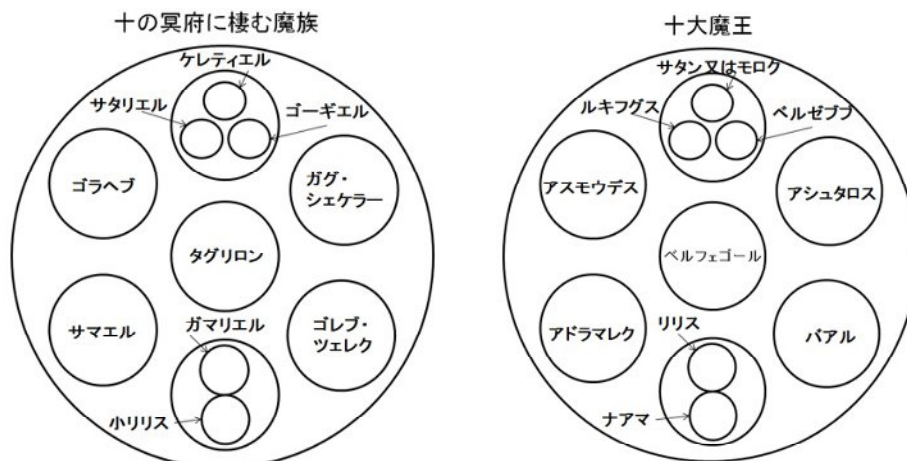
早期の伝承から、リリスに2体、母と娘があることが知られていた。ハシディズムの伝統においては、母娘リリスは、修行者を惑わす長き黒髪 of 婦人として出現する。<sup>(45)</sup>

ラビ・イサク・ベン・ヤコブ・コーヘンの残した文書においては、「嫉妬の宰相」を束ねるサマエルの妻リリスの逸話がある。

前述したようにサマエルは、天使としての側面と魔王としての側面を併せ持つ。魔王サマエルの妻がリリスであるが、あたかもアダムとイブのように、この2者はクリポトの上に聳え立つ。

カバラの悪魔学の伝統では、リリスの名をもつ魔王と魔族はふたりいる。サマエルの妻である母リリスとアシュモダイの妻である乙女リリスである。<sup>(46)</sup>

この2重性と分裂は、次の黄金の夜明け団の図版で説明できる。<sup>(47)</sup>



左上図は、嫉妬の宰相たちの名前であり、右上図は、魔王の名前である。

そして、右側の第7宮の闇のマルクトにあるリリスは、「大いなるリリス」であり、左側の第7宮の闇のイエソドにあるリリスは、「乙女リリス」である。

「大いなるリリスが人間を墮落させるために出現するときは、薔薇のような赤毛の長い髪を垂らし、白い肌にピンクの頬を見せ、耳に六つの飾りをつけ、東洋風の首飾りをつけ、その口は瀟洒な扉のようで、化粧品を豪華に用いて、その舌は剣のごとく踊り、彼女の言葉は

(43) Op. cit., p.505.

(44) Op. cit., p.532.

(45) Howard Schwartz, *Gabriel's Palace Jewish Mystical Tales*, Oxford: Oxford University Press, 1993, pp.221-222, 337-338.

(46) 「・・・「小宮殿」の章に曰く。この叡智を継承する学者たちは、太古からの深遠な伝統を有している。サマエル、万物を領する王子は、「乙女リリス (若き者)」と呼ばれるリリスの件で、激しくアスモウデスに嫉妬している。彼女は頭から腰までは美しい女性の姿であるが、腰から下は燃える炎である。あたかも母と娘のように。彼女はメヘタベル、メトレドの娘と呼ばれており、浸洗されるもの (マブー・タバル) という意味である。」

Joseph Dan, "Treatise on the Left Emanation," in *The Early Kabbalah*, Mahwah: paulist Press, 1986, pp.179-180.

(47) Pat Zalewski, *Kabbalah of the Golden Dawn*, St. Paul: Llewellyn, 1993, pp.144-146.

油のごとく滑らかで、その唇は美しく、薔薇のごとく赤く、この世のいかなるものより甘い。」  
『ゾーハル』 I、148a-148b)<sup>(48)</sup>

## j 魔王ナアマ

### 第10の逆セフィロト（キムラヌース。闇のマルクト）

第10の魔王はナアマ (נאמא) である。

メトセラの子レメクは二人の妻を娶った。第2婦人チラの産んだ男子が金属加工の技に秀でたトバル・カイン、そしてノアであり、その妹がナアマである（『創世記』4章22）。

ラビ伝承の一説によると、ナアマはノアの妻として「喜び（ナアマ）」と呼ばれたという。しかし、大多数のラビはそれを否定し、偶像に喜びの歌を供えた墮落した女であるという。

また、ナアマは天使ウザ、アザエルと交わり巨人族ネフィリム（墜ちたる者たち）を産んだとされる。

ノアの一族が神の属性を失わない長命種として存在した時代の娘である。ナアマの伝承は、「そして彼女は未だ生きている。」と結ばれる。彼女は邪悪な霊的存在に変化したのである。

魔王ナアマは、四人の売春の天使のひとりと言われる（他の三人は、リリス、エイシエス・ゼヌニム、アグラト（イグレス）・バット・マハラトである。）。

カインがアベルを殺害して以来、アダムは妻を遠ざけていた。その間にアダムに連れ添ったのはリリスとナアマであり、アダムとの間に悪霊となる子供たちをもうけた（Z III、76b-77a）。<sup>(49)</sup>

彼女は上記の経緯から「悪魔の母」また、「スキュプスの女王」と言われる。

また、魔王アスモウデスの母とも言われる。

リリスとナアマは、人間の幼子を殺す悪魔である。

彼女もリリスと同様に美しい女性の姿で現れる。



(48) Tishby, op. cit., p.538.

(49) Isaiah Tishby, *The Wisdom of the Zohar*, Volume II, Oxford : Oxford University Press, 1989, p.542f.

## k 魔王ルシファー

### 第11の逆セフィロト（闇のダース）

11番目の魔王について語らねばならない。それは第11の闇のセフィラに属する。そのセフィラの名はダース。これは倒置された《木》においても同じ名前である。闇のダースに対応する名前はない。（光のダースにも本来、神名は対応しない。）そして、その虚の闇を支配するのが、最初の反逆者大天使ルシフェルである。



反逆者の神話の原型は、カナン神話において主神に反逆した若き神アトタルである。

「反逆者アトタルはザフォンの地に登った。かれは即位してアリヤン・バアルの王座につく。かれの足は足台に届かず、かれの頭は最上部に届かなかった。・・・」<sup>(50)</sup>

バビロニアの神話体系においてはヘレルと呼ばれ、ユダヤ人もそれを伝承し、「輝く星」（הַיְלֵל הַקָּדוֹן　ヘイレル）と呼んだ。

「輝く星、朝の子よ、いかにして天より落ちしや」（『イザヤ書』14章12）

「輝く星」と同義語とされた「朝の子」（הַיְלֵל בֶּן שַׁחַר　ヘレ・ベン・シャハル）とは、惑星の金星を意味する。<sup>(51)</sup>

聖書をギリシャ語へ翻訳する段階で、パエトンが父ヘリオス神の太陽の戦車を盗んで罰せられた故事にちなんで、ヘオースポロス（ho proi anatellon）と訳された。ヘオースポロスとは、ヘオースの息子、同じく金星を意味する。<sup>(52)</sup>

ラテン語訳においては、ルキフェル（LUCIFER）と訳され、（LUX+FER）は「炎を運ぶ者」を意味する。<sup>(53)</sup>

厳密に言うるとルシファーを魔王として捕らえるのは困難かもしれない。破壊天使サマエルが、神の命令で激烈な死と破壊を運ぶように、神の命令に反して人間に試練を課すことを目的としたルシファーは誘惑者としてより、克服すべき障害をもたらす霊だからだ。酷寒の霊サタンとは対極にルシファーは炎熱の霊とされる。

(50) フォーサイス、前掲書、177、178頁。

(51) Ide, op. cit., p.19.

(52) Ide, op. cit., p.18.

(53) フォーサイス、前掲書、182-185頁。

### (3) 十の冥府に棲む魔族

#### a ケレティエル

##### 第1の逆セフィロト (バチカル。闇のケテル)

邪悪の宮殿では、最初の宮殿に闇の三つ組が含まれている。バチカルには、ケレティエル「神から切り離されたもの」(『詩篇』37章34；悪しきものは(神から)切り離され)が帰属している。その象徴的な姿は、黒い、邪悪の巨人である。

また、タウミエルまたは、タミエルも属している。双頭の者、その姿は巨大な二つの首を持つ、こうもりに似た翼で現される。彼らは胴体を持たない。なぜなら、その首は憑くべき他の生き物の肉体や霊的存在を常に探し続けているからだ。

#### b ゴーギエル

##### 第2の逆セフィロト (エーイーリー。闇のコクマー)

エーイーリーには、エサウの公爵とゴーギエル(バシャンの王、オグから由来)、または、しばしば書かれるように、オーギエルが帰属する。そして、かれらは生物の物質的肉体に変化する。その外観は、忌まわしい蛇が巻きついた黒い邪悪の巨人である。

#### c サタリエル

##### 第3の逆セフィロト (シェリダー。闇のビナー)

サタリエル、またはハラシエル、覆い隠すもの、破壊者が関連する。その姿は角を持ち、ヴェールを被った顔に巨大な目を輝かす巨人である。彼らには悪のケンタウロスが従う。彼らも毛深いので、エサウから取ってセリエルと呼ばれる。

#### d アディシュース

##### 第4の逆セフィロト (アディシュース。闇のケセド)

第2の宮殿は、アディシュースを含み、その上にはガグ・シェケラー、妨害者が帰属する。その象徴的な姿は、猫の頭を持つ黒い巨人である。彼らは、アジエル、カザリエル、そしてアグニエルとも呼ばれる。

#### e アクゼリユース

##### 第5の逆セフィロト (アクゼリユース。闇のゲブラー)

第3の宮殿は、アクゼリユースを含み、そこにはゴラヘブ、火で焼き尽くす者。またの名をザフィエルが帰属し、その姿は噴火する火山のような巨大な頭である。

#### f ザミエル

##### 第6の逆セフィロト (カイツール。闇のティファレト)

第4の宮殿は、カイツールを含み、そこにはザミエルが帰属し、彼らはお互いに戦い続ける黒い巨人である。

g ゴレブ・ツェレク  
第7の逆セフィロト（ツァーガブ。闇のネツァク）

第5の宮殿は、ツァーガブを含み、ゴレブ・ツェレク、追い散らす大鳥が帰属する。その姿は、火山から生まれた悪魔の頭部を持ち、ゲツフィエルとも呼ばれる。

h サマエル  
第8の逆セフィロト（ケムダー。闇のホド）

第6の宮殿は、ケムダーを含み、サマエル、詐謀者（魔術師）、正しく悪魔の頭部を持つ犬のような怪物が帰属する。

i ガマリエル  
第9の逆セフィロト（アイーツァップス。闇のイエソド）

第7の宮殿は、アイーツァップスとキムラヌースを含む。アイーツァップスには、ガマリエル、淫蕩者、その墮落した姿は忌まわしい結合した雄牛・人が帰属する。そこには、ナカシエル、邪悪の蛇、オブリエルも帰属する。そして、盲目の竜の勢力も帰属する。

j 小リリス  
第10の逆セフィロト（キムラヌース。闇のマルクト）

小リリス、邪悪なる婦人が帰属し、その姿は最初、美しい姿で現れ、次の瞬間には黒い猿に似た悪魔に変貌する女である。蛇ナカシュの数字は、クリポトを世界から根こぎにしようとするメシアーの数字と同じである。

『小宮殿の秘密の知識』に曰く、リリスの名前はメヘタベル、「何かを浸す（マブ・タバル）者」である。

上半身は若き乙女、下半身は生きている炎で出来ている。

大いなるリリスの項で示したように乙女リリスの夫は魔王アシュモダイである。





## 4 四大の性質

『旧約聖書』の天地創造の場面で、神は「光あれ」と叫ぶ。ラテン語聖書『ヴルガダ』では、*Fiat Lux* である。この光は神の創造した宇宙の基本要素で、第1の物体形相 (*Prima Forma Corporalis*) としての光の質量が凝集して五元素を生じ、目に見える宇宙を構成する。光の能動的成分は拡散し宇宙の境界線を拡大するとともに、その質量は凝集し、風 (*Flatus*) となり、この風は火 (*Ignis*) と水 (*Aqua*) の調和を保ちながら、地 (*Terra*) において運動を停止し、夜空に輝く星を生む。ここまでの星界の四大である。従って、これらは星素 (*Aether*) の四つの成分ないし、四つの方向性であると言っても良い。月下界と星界を分ける差異は、この地上がマルクトの反映であるのに対して、地上から見上げる我らにとっては、星界は他のセフィロトの反射であるという微妙な性質である。むしろその星を住居とする異星の住人にとって見れば、この地球もまた星素のヴェールを被り、他のセフィロト (必ずしも同じ体系とは思えないが) に対応させているだろう。星と大地の違いは、その比較しようもない距離である。その霊的影響力が、個別的に働くのが大地であるとすれば、星の影響力は集合的であり、惑星霊などは星の全霊的存在のオーラがひとつの象徴をまとめて見えているに過ぎない。惑星でさえこのように働くのだから、他の恒星においてはシリウスなどの例外を除いて、星座としての集合単位か、宇宙の切割りとしての宮でしか影響力をもたない。これは距離の暴虐であり、いずれ魔術師が他の天体に立つことがあれば、地球の体系とは違うシステムを開発する必要に迫られるだろう。

さて、星界の四大は月の領域を越えるとさらに濃密化してマルクトの領域に触知可能な世界を生み出す。これが日常的に接する四大である。

パラケルススは、この地上の四大について詳細に語っている。かれは地上の四大、すなわち目に見える元素は、本来の意味の元素ではなく「本当の元素」の《身体》であると考えた。本当の元素は力動的なもので、ひとつの魂である。人間の靈魂とは異なるが、靈魂に類似したものである。例えば、燃えている火は「火の元素 (*Elementum Ignis*)」ではなく、その内部にあって我々には見えない火の魂が真の火の元素、目に見える火の生命なのである。それと同様に、水や風や地の元素が、水、風、地を生み出したが、それらは別のものである。

つまり、かれは四大を物質の存在態様、物質的物体の四つの形成原理、四つの種類として見ている。元素とその物質的顕現を混同するなというかれの教えは今でも有効である。例えば、四大を物質のエネルギー状態と解釈することもできる。

エネルギーという概念のない時代のブラシウス・ヴィゲネルスは、四大を四種類の火として、表現した。すなわち、「しかし、火は四種類の性状を有している。第一の火、世界の火は理解しやすい。その火は全くの光ばかりである。第二の火は天上的であり、熱と光に関与している。第三の火、元素的な火は、光、熱、輝きにおいて劣る。第四の火、冥界の火は理解可能な火と対立関係にある。この火は輝きと熱をもっているが、光は全くない。」<sup>(54)</sup>

これをさらに敷衍すると、物質の密度分布 (分子運動) 状態を表す言葉で語ることもできる。つまり、茫漠たる光を放つプラズマ状態 (通常の火はプラズマまでいかないが、太陽表面の状態を想起していただきたい。) の《火》、透明にして自由な気体状の《風》、流れる液体状の《水》、そして極小の運動状態にある《地》というイメージである。アグリッパは、この四大の性質をより明快に分析している。

「感知しうる元素が純粋な形で現れることはなく、多量に、または少しばかり混合して現出する。泥土を融熔すると液状になり、それは再び固まる。過熱して蒸発させると気体となり、点火すると炎となる。これを放置すると気体に戻り、焼却した後に冷却すると土や、石や、硫黄に戻る。」

(『オカルト哲学』第1巻第3章)<sup>(55)</sup>

我々はこの四大を深く理解するところから始めねばならない。

(54) C. G. ユング、M-L. フォン・フランツ『アイオーン』人文書院、1990年、149頁。

(55) Henry Cornelius Agrippa of Nettesheim, *Three Books of Occult Philosophy*, St. Paul : Llewellyn, 1995, p.8.

第1章で述べたように、この四大は大きく二つのカテゴリーに分けることができる。すなわち、その方向性で上向きと下向きに分けるのだ。火と風は軽く、上に向かう。逆に、地と水は重く、下に向かう。なお、アリストテレスは地の元素の中心指向性（かれは重力という単語を使用していない。）から、大地が球形であることを証明している。

上昇原理（能動性） ----- 火            風  
 下降原理（受動性） ----- 水            地

さらに、大自然の元素としての四大は、人間精気（Spiritus Humanus）にも強い影響を与える。その考え方の基礎は、四つの体液のバランスが崩れたとき人間は病気になるというものである。この液体のバランスの変化は人間の気質に反映する。そして、ガレノスによる気質の四区分は四大に対応している。

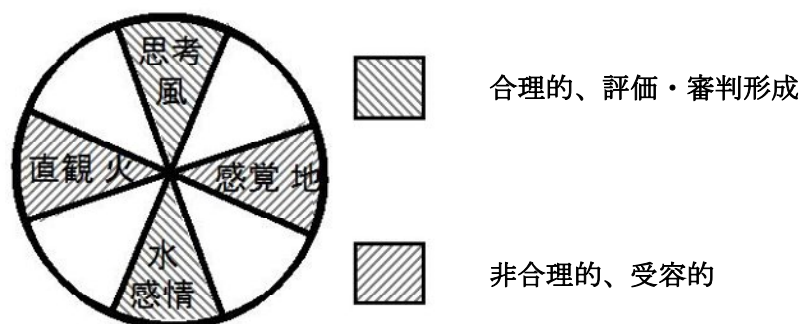
火	-----	胆汁気質	Choleplania (safrawi)	黄胆汁
水	-----	粘液気質	Phlegma (balghami)	粘液
風	-----	多血気質	Sanguis (damawi)	血液
地	-----	憂鬱気質	Melancholia (sawdawi)	黒胆汁

ヒポクラテスは、「環境が人間の体液に影響する」と述べた、物理的な体液そのものは、その後の医学の進歩で否定されたが、人間の気質を四つの類型に分けるという考え方は優れた発想であり、今日でも肯定的に捕らえる学者もいる。

これと似た発想に、四大に対応する四つの機能に人間の活動を分割しようとする古代ギリシャの考え方がある。

火	-----	倫理的機能
水	-----	感覚（魂）的機能
風	-----	知的機能
地	-----	物質的機能

この概念を換骨奪胎したのが心理学者ユングである。かれは人間の心理機能を四つに分割した。その概念と四大との関連を示したのが、次図である。



従って、ある意味では人間の精神の奥底に四大が潜んでいると考えても良い。

#### 地の元素

地の基本的性質は「冷」にして「乾」である。そして、アリストテレスによると地の特徴を最

も良く表すのは「乾」である。火山爆発に伴う熔岩などは、溶けて流れているが、それは地に強烈な火の性質が交わったためである。そして、同時に地は下降原理の最たるものである。四大を並べたときは、地が最も下方に来る。地は全ての元素を受容する容器でもある。

地の他の性質は、「暗」、「濃密」及び「不動」である。

大地の方位としては北を示す。

#### 水の元素

水の基本的性質は「冷」にして「湿」である。水の性質を最も良く表すのは「冷」となる。水も下降原理であるが、地の上に来る。水は形をもたない。水を盛る器により、様々な様相を取る。

水の他の性質は、「暗」、「濃密」、「動」である。

大地の方位としては西を示す。

#### 風の元素

風の基本的性質は「熱」にして「湿」である。風の性質を最も良く表すのは「湿」となる。風は上昇原理であるが、火よりも低い場所にある。

風の他の性質は、「暗」、「希薄」及び「動」である。

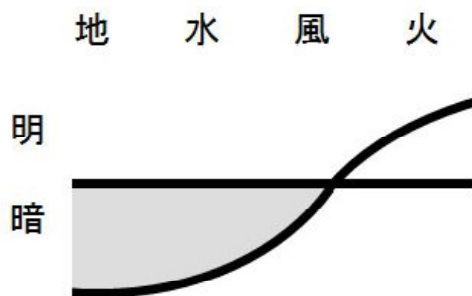
大地の方位としては東を示す。

#### 火の元素

火の基本的性質は「熱」にして「乾」である。火の性質を最も良く表すのは「熱」である。上昇原理として他の元素よりも高きに昇る。火は全ての物質を貫き破壊する。同時に火は新たな物質を創造する。その最も高次の火は光としての性質を帯び、全き熱と光をもたらす。しかし、火は活動を弱めた姿で、全ての鉱物、植物、動物、人間のなかに内在する。外界の熱と内部の熱は火の作用である。

火の他の性質は、「明」、「希薄」、「動」である。

大地の方位としては南を示す。



## 5 四大の意識開発

錬金術的視点に立つならば、「賢者の石」もまた四大で構成されている。

対立するものを統合するのが「石」の機能であるなら、それを頂点とした四者は絶妙のバランスを保っていなければならない。しかし、例えば精密なバランスをもつ石でも、製作者の器そのものが小さいのでは、小粒なものにならざるを得ない。以下は、大いなる賢者の石を育てるために、自らの内部にもつ四大を育成する方法の一端を示す。

四大の性質に関する説明は、読み流しても良い。その性質をあなたが把握するための助けになれば良いのだから。それに続く作業についても、やるやらないは自由である。試しに1週間ほど行うのも良いだろう。学習の現段階では、四大に関する完全な認識を期待されていないからだ。

### (1) 地の性質

我々の生活空間のなかで、最大の影響力を奮うものは地の諸力である。誰もが一瞬たりとも大地を忘れて暮らすことはできない。それは確固たる存在感をもって靴底にあり、地の性質に逆らおうとすると、登山道や、穴掘りの作業中に嫌と言うほどその存在感を味わうはめになる。大地のもつ最大の力は、重さである。重力は、電磁力などの強い相互作用と比べると相当微弱的な力だが、人間対地球などと言う途方もない尺度で相対すると、絶望的なまでの猛威を奮う。次に強烈な力を及ぼすのは地磁気である。その力は小さな磁石を買えばすぐに理解できる。これは、大気の上層部に帯電したガスの障壁を保持して、我々を宇宙の放射線から護る力でもある。

魔術的な意味では、地は万物の皮膚と骨格である。その入れ物なくして、風も水も火も運ぶことはできない。地の性質として愚鈍や重厚が上げられるが、より正確には慣性と捕らえた方が良いだろう。動き出すまでは膨大な努力を必要とするが、それを再び止めるためには、同程度の努力を傾注しなければならない。

地の魔術武器は、「万能章」である。これは、「万物の鍵—Pentacle」であり、しばしば多角形に外接する円形の意匠をもつ平らな円盤として作成される。五芒星を描いた板を意味する「五鍵章—Pentacle」ではない。カバラの伝承では、三元素（火、水、風の最終的な受皿が地であるとされている。従って、万能章は一般的に三角形、四角形及び六角形の外接円として、円盤の形態になる。

内的レベルにおける地の統御は、肉体の完全な理解、自然との一体化を意味する。霊的修行が、知的鍛練に終始すると必ず地が反逆する。

心理占星学のカテゴリーでは、地は感覚作用である。ユングの分類では、感覚は非合理的機能に含まれる。

### 山への歩行

部屋の北側の壁を片付けて部屋の中央に北向きで座る。ライトが背中から当たるようにして、そのスイッチを持っておく。

四拍呼吸を繰り返し、弛緩する。肉体の準備ができたら、ライトを消して仄かな暗闇にする。（完全な暗黒は望ましくない。）「我が前にアウリエル」と呼びかけ、小五芒星儀礼の大天使アウリエルを召喚する。複雑な手順は必要ない。小五芒星儀礼を真剣に学習していれば、その室内の空間に焼き付けられたアウリエルの像が浮かびあがってくる。（これを本格的な大天使召喚と勘違いしないように。）

次に、北の遙かな彼方に岬々たる大山脈を視覚化する。これは古代の失われた神々が住む北の神殿ザホンの山並である。あなたは思念体を視覚化し、その思念体に意識の焦点を移し、遠方の山脈に向けて歩き始める。道筋は、記憶の底にある故郷の良く知った風景を選ぶこと。細部に至るまで、精密に思い出しながら、雑踏のなかを、或いは無人の棒道を歩いていく。ただし、その道が続く彼方には、常に青々とした山脈が控えている。迎える限りの記憶の道を歩い

ていき、それ以上は思い出せない場所に辿りついたら、さらに道を作りながら歩いていく。

この瞑想では、山に辿りつくことは目的ではない。これ以上、道が作れなくなるか、山の特別な場所に到着したと感じたら、意識を肉体に引き戻し瞑想をやめる。

部屋の照明をつけ、小五芒星の追儼儀礼を行いなさい。

## (2) 風の性質

風は呼吸によって、その物質的性質とより微細な性質の双方を人間の内部に運び、靈魂体を楽器のように共鳴させて出てくる。我々は濃密な風の大洋を泳ぐ魚のようなものである。それなくしては一瞬も生きることにはできないが、普段は気にもとめない。

風は物質的性質として、音を媒介する。そして、我々の耳に辿り着いた音は意味をもたらす。この世界は、宇宙の摂理がたなびく音楽で満ちている。そのなかには人間にとっては不協和音に過ぎないものもあるが、ひとたび意識を別の生命に調律すれば、天使の歌声を認識することができるだろう。大いなる声は上空を吹き過ぎ、大地と海には生命の歌声が満ちている。むろん、死と破壊の歌声もある。天使の合唱団は、賛美歌を歌う喉で軍楽隊の戦慄の楽譜を追うこともできるのだ。

風はまた匂いも運ぶ。この香は大部分が生命の営みである。そして、ときには硫黄や、立木の焦げる死の臭気も漂う。

風の魔術武器は短剣である。これは文字通り、短い両刃の剣であり、片刃のナイフではない。また、当然だが長い刀身を持つ魔術剣とも違う。剃刀のような刃をもつ短剣は、未使用の金属製品で、鏡のように輝いていなければならない。その鋭利な切っ先は、靈的なゴルディアスの結び目を一刀両断する覚悟を示す。

内的レベルにおける風の統御は、宇宙の音楽を御することである。肉体を完全な楽器として扱い、風の語る意味を理解すること。内的な風は、鋭利な知性として発現する。その知性は思考の枠さえ越えて、物事の深奥を洞察する。

心理占星学のカテゴリーでは、風は思考作用である。ユングの分類では、思考は合理的機能に含まれる。

## 魔法鏡凝視

自作の魔法鏡を用意し、薄暗くした部屋の中央に東を向いて座る。

魔法鏡の表面に雲を視覚化せよ。薄ぼんやりした雲が流れる風景を視覚化したら、その切れ間に見える空の青さに集中せよ。

ただひたすら流れる白雲と青い空を眺め続けよ。その映像が迫真力をもって捕らえられたら、頭を上げ、大天使ラファエルを召喚せよ。「我が前にラファエル」

そして上空を浮遊する大天使の背後が、全て群青色の濃い風で満たされている様子を視覚化せよ。人間の目は風そのものを見ることはできない。風によって運ばれる雲、砂塵、木の葉、その他の物質や影などでそれを知るだけである。しかし、今は視力に頼ることなく靈的視覚で、空の色の濃淡さえも越えた、風の乱舞を、その密度を、力を迅さを直接に把握せよ。

作業終了後、小五芒星の追儼儀礼を行うこと。

### (3) 水の性質

水は生命の繁殖と発芽の媒体である。その大いなる循環により、世界に生命が満ち溢れ、世代が交代していく。物質としての水は我々の生活する狭い範囲のなかで容易に、凍結し固体となり、溶けて液体として流れ、蒸発して気体になり上昇する。物質の三つの主要な位相を目の前で演じる希有な存在である。

水の魔術武器は盃である。盃は形のない水を区分けする道具であり、水の支配を意味する。同時に、盃は血液を運ぶ心臓を象徴する。アーサー王伝説の聖盃は、無垢な若者の生命を糧に出現する。また、盃の底は、無限に深い人間の心の奥底に結びついている。内的なレベルでの水は意識を運ぶ容器である。意識に生命力を賦活し、行動に動機を与える。『創世記』の最初の記述では、主は「上なる水と、下なる水を創造された」茫漠たる意識の地平は、しばしば、水で表現されるが、この巨大な生命力のプールには、無数の発芽前の意識の萌芽が眠っている。

心理占星学のカテゴリーでは、水は感情作用である。ユングの分類では、感情は合理的機能に含まれる。

#### 乾 盃

部屋を薄暗くして、部屋の中央に自分の両手で丁度包み込める大きさのガラスのゴブレットを置く。窓のカーテンを開け放ち、ゴブレットのなかに月光を満たす。これを行う時期は、新月から満月までの「明るい半月期」が良い。満月が欠け始めたら行わないように。意志力と視覚化の技術を駆使して、銀色の冷たい光が盃を満たす。次は、西に面して、「我が前にガブリエル」と唱えて、大天使を召喚し、その臨場の前で、月光をを味わいながら飲み干せ。

翌日、今度は窓を開けて、自由な風を入れ、ゴブレットに風を満たす。西面し、大天使を呼び、盃のなかに風が渦巻くさまを視覚化し、それを飲み干す。

3日目は、ゴブレットに真水を満たして、一掴みの粗塩を放り込んでおく。西面し、大天使を召喚し、それを飲み干す。

4日目は、葡萄酒を満たしておき、西面し、大天使を召喚し、それを飲み干す。

この日は、意識の底に潜るつもりで、瞑想せよ。

各日の終わりに小五芒星の追儺儀礼を忘れないように。

### (4) 火の性質

火の元素は、宇宙的な放射エネルギーに関連している。その特性は、人間を奮い立たせ、熱狂させ、世界に色を与えるものである。火を制することにより、人間は動物状態から、文明化した。

内的レベルにおける火の統御は、その精神を神聖な領域に近づける。もし、完全な人間がいるならば、元素のそれぞれの究極の姿と接することができるだろう。しかし、不完全な人間には難しい。純化した精神以外のものが、火を扱うと手酷い火傷を負うであろう。

火の魔術武器は、「棒」である。原始時代には、棒は火を安全に扱う唯一の手段であった。稲妻に裂かれた木の幹から、洞窟の焚火の床へ天の贈り物を運ぶのは棒である。現代人は、より身近に「棒」を捕らえることができる。ありふれたマッチ棒は、指先の一振りですぐに炎を生み出す。高圧電流を流したロッドの先端からは、電子の火花が散り、原子炉の制御棒は核分裂の炎を操る。

心理占星学のカテゴリーでは、火は直観作用である。ユングの分類では、直観は非合理的機能に含まれる。

## 火を灯す

燭台や、ランプの火を灯すことが、様々な儀式を開始する重要な手続きとなっている。アストラル・キャンドルという多色の蠟燭を用いる儀式などでは、点火そのものに神秘的な意味がある。ここでは、火の意味に触れるための簡単な儀式を紹介しておこう。室内の可燃物を全て整頓した上で、床を奇麗に掃除し、部屋の中央と四隅に蠟燭（または簡易ランプ）を置く。火事にならないように、蠟燭を単独で用いてはいけない。また、部屋の中央には灯芯（細い薄板に蠟引きしたもの）とマッチを置く。部屋を真っ暗にして、部屋の中央で南を向き座る。

最初は闇を喚起する。想像力を最大限に働かせて、夜の荒野に一人で放り出され、助けも、帰る方向も分からず、忍び寄る闇の生き物に取り囲まれている様子をイメージしなさい。恐怖に溺れることはないが、闇のもつ力を感じ取りなさい。

次に、大天使ミカエルを召喚する。ただ一言、「我が前にミカエル」と唱えて、小五芒星の儀礼に現れる大天使の姿を強くイメージする。

大天使の力を全身に感じながら、自分の内部の火のエネルギーを呼び起こしつつ、マッチを刷り蠟燭に火を灯す。世界が瞬時に光に満たされる様子を、生き生きと感じ取りながら、炎について瞑想する。灯芯に火を移し、立ち上がる。我らの最初の父祖が、そうしたように無力で四足歩行する動物から、火を従え両足で歩く人間へと進化した過程を真似て。あなたは松明保持者として、東に向かう。光のもたらされる方角に。そこで、東の燭台に火を灯す。そして太陽の動く順序に、南、西、北と火を運んでいく。全ての四方の蠟燭に火が移されたら再び中央に座る。

可能なら火の魔法円に囲まれて、全ての燭台が消えるまで瞑想しなさい。あなたの頭上遙かに漂うミカエルの臍で巨大な影を透視しながら、全ての生命に恵みを与えかつ奪う火の意味について。

時間的余裕がないならば、北～西～南～東～中央の順で蠟燭を消し、部屋の明かりを点けなさい。作業の場を片付けて、即座に小五芒星の追儼儀式を行うこと。

## 実践講座

### 6 四大の象徴武器

#### (1) 四大武器と聖四文字

四大の天なる帰属体系には、最終的に神の四文字の名前 I H V H が対応する。

その帰属は、次のとおりで、ここから四大武器の概念が生まれる。元素が単独で現れることはないので、そのうち一つを用いる場合でも他の三者をその場に置いておくことが勧められた。四大の魔術武器を用いるということは、聖なる四文字の名前を用いて作業を行うということである。決して軽々しい目的に使用してはならない。

文字	名前	元素	武器
I	ヨド	火	棒
H	へー	水	盃
V	ヴァウ	風	短剣
H	へー	地	盤

#### (2) 四大武器の作成

四大武器の準備は、喚起魔術の第1歩である。霊に対する完璧な支配力を保ちたかったら『黄金の夜明け魔術全書』下巻（国書刊行会）にある《黄金の夜明け》団の魔法武器を自作し、聖別する必要がある。しかし、「黄金の夜明け」体系では四大武器は、ジェレイター・アダプタス・マイナーの作業とされていた。魔法武器そのものを工作するのは、それほど困難ではない。しかし、単なる鉄やガラスの塊を魔術的な力で充填することは素人にはできない技である。

そこでどんな目的で武器を作成するかが問題になる。単に雰囲気を感じたいのだと言うならば、棒、杯、短剣、円盤を準備して指定の色に塗り分けても良い。しかし、その場凌ぎの武器を作成することにあまり意味はない。もし、諸君がこのまま学習を続けるつもりであれば、四大の位階において、それぞれの魔術武器を自作し、聖別することになるからだ。

しかし、素材を繰り返し魔術的作業に用いることで、ある程度までは、四大の性格を刻印することは可能だ。そして、その素材を用いて将来資格を得たときに本格的な魔術武器を作るならば意味があるだろう。

その視点を用いて以下に、四大の位階の準備のために作成する仮の武器を紹介する。最初から、形だけでも《黄金の夜明け》団の規定する方法で作成したいのであれば、ロバート・ウォン著『秘密の聖堂製作法』（魔女の家BOOKS）やキケロの文献などを参照すると良いだろう（ウォン版は、神名が異なるので注意）。

なお、次頁以下の説明で用いる横文字はヘブル語の等価文字なので、実際にはヘブル語で書き込むこと。シギルについては記載しなかった。従って、名前と名前の間には隙間を開けておき、シギルの意味を理解してから、それを記入すること。



## a 火の棒の作成

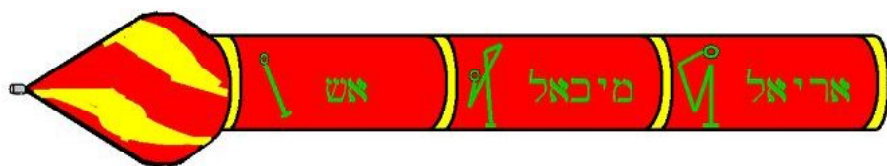
直径約3センチ、長さ30センチの木の棒材を買ってくる。それ以上長いものを切っても良い。柔らかい素材の方が穴を空け易い。《黄金の夜明け》団では、長さは46センチ（18インチ）を越えないことという規定があった。後に先端には、炎の蕾み（円錐）を接続するので丁度40センチほどになる。

長さに魔術的意味はない。使用の便利を考えたものである。さて、大きな問題がひとつある。火の棒の中心には磁化した鉄芯（針金）を通す必要がある。棒に細い穴を開けるのはかなり高度な技を必要とする。事実上素人には無理である。そのような中空の穴開き棒（竹を用いるというやり方もあるが）を購入できなければ、切断して鉄芯を入れる。縦に割って接着剤で張り合わせる方法が単純で良い。もうひとつは、2～3個に輪切りにしておいて穴を開けて繋ぐやり方である。これは穴を一線にするのが難しい。鉄芯は、それらしい物を準備できなければ2～3ミリの針金を用いても良い。磁石を走らせて、磁化すること。鉄芯を仕込んだ棒の表面をサンドペーパーで滑らかに仕上げ、絵の具で赤く塗る。両端は1センチだけ黄色でポイントを付ける。そのとき鉄芯を塗らないように。赤地の部分に緑で次を書き込む。

書き込む位置については指定はないが、均等に全周が文字で埋め尽くされるようにすること。磁化された鉄芯のS極を炎の蕾み（円錐）側とする。反対の極も僅かに露出する。

炎の蕾みは、紙粘土で加工するなり、あらかじめ木製の部品に穴を開けておくなりして準備する。螺旋状のねじれを入れると文句のない仕上がりになる。

ALHIM  
MIKAL  
ARAL  
ShRP  
PIShVN  
DRVM  
ASh  
自身の魔法名



## b 水の杯の作成

水の盃を準備するときは、素材が大切である。基本的には次の4種類が考えられる。

素 材	入手の難易	加工の難易
ガラス製品	入手が容易	加工が不可能
白目の金属製品	入手が困難	加工が容易
木製品	入手が困難	加工が容易
陶器製品（自作）	技術が必要	技量次第ではどんな形にもできる。

要は凝ろうと思えばどこまでもできる。逆にシンプルなものでも良いと思えば、すぐに作成できる。盃には8枚の花弁が下から包み込む構造となっている。

ガラス製品を用いるときは明るい青のものを選び、花弁を群青色のエネメル・ペイントで塗

りつぶす。

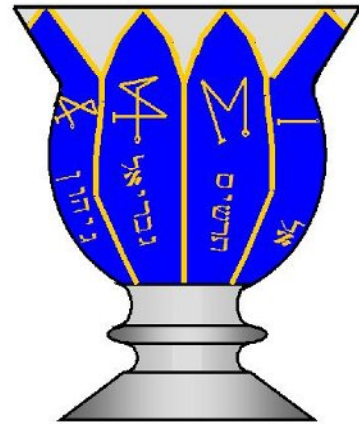
金属製品を用いるときは、地を銀色とし、花卉を鮮烈な青にする。

木製や陶器を用いるときは自分の感性を信じてどちらかを選びなさい。

花卉の枠及び文字は明るいオレンジで描く。

名前はちょうど八つである。花卉の下端から描いて、上端をシギルのために開けておきなさい。

AL  
GBRIAL  
TLIHD  
ThRShIS  
GIHVN  
MORB  
MIM  
自身の魔法名



### c 風の短剣の作成

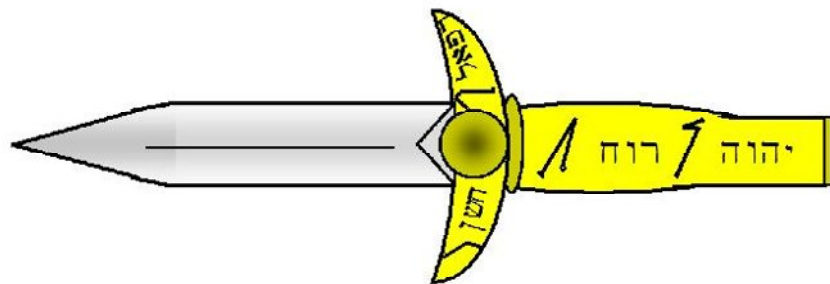
刃渡り20センチ前後の未使用の短剣を用意する。前項で述べたようにナイフや包丁は、適当ではない。また、ブレードにギザギザの入ったものや、黒のつや消しコーティングが入ったダイバーナイフ等も駄目だ。長すぎてもいけない。どのみち日本国内では、長い刃物やダガーナイフを所有すると銃砲刀剣類不法所持で捕まってしまう。

そして、この短剣は風を切る刃そのものであり、鋼鉄製品でなければならない。

土産物屋で良く売っている真鍮製品は、小五芒星儀式の短剣として用いるのは差し支えないが、風の短剣には相応しくない。同様に、ガラスやセラミック製品も不適當である。素材はあくまで鋼にこだわること。片刃の短剣、諸刃であるが銃刀法の規定に合わせて片刃を削ってあるものについては、儀式の所作においては切れる方向に走らせること。

この短剣の柄と鐔を黄色く塗り、柄の上に紫の文字で次を書く。

IHVH  
RPAL  
ChShN  
ARIAL  
HDQL  
MZRCh  
RVCh  
自身の魔法名



## d 地の盤の作成

地の盤（万能章）が最も意匠としては単純である。

ここに述べるものは《黄金の夜明け》団で用いたものと同じである。

直径10～12センチ、厚さ1～1センチ半ぐらいの円盤状の合板を準備する。中心に六芒星、周囲に円を白く描く。その内側は90度ずつ四等分し、次の色で塗り分ける。

上端：レモン色

右端：オリーブ色

下端：黒

左端：アズキ色

最後に外周の白い部分に黒で次を書く。

ADNI  
AVRIAL  
PVRLAK  
KRVB  
PRTh  
TzPVN  
ARTz  
自身の魔法名



### (3) 四大武器の聖別

《黄金の夜明け》団は実に複雑な儀式を行って魔法武器を聖別した。その手順については、「四大の位階」で順に実施してもらおう。ここでは、略式武器に十分な効果をもたらす方法を教える。次の作業を1週間続けて、貴方の魔法武器にエネルギーを充填しなさい。

#### a 火の棒の聖別

自分の香炉に火を入れ、その上に「棒」を捧げ持ち、香炉の熱と炉芯の光を感じながら次の祈祷文を唱える。その間、サラマンダーのイメージを「棒」の上に重ねる。意識のスクリーンのなかで、流れる熔岩の輝きを上から覗き込んでいる。火山の噴火の映像を思い起こすと良い。粘性の弱い熔岩流は水のように泡立ち、ときおり白熱する斑点を浮かべながら流れていく。その赤熱の河のなかに不定形の生き物、どことはなく蜥蜴を連想する姿が見え隠れしている。その足は4本か、6本か、その丸い鼻面は山椒魚にも似ている。かれらは清涼な池の水に遊ぶ両生類のように、自在に灼熱の炎のなかを泳いでいる。そのエーテル的素材を構成する火の元素は、さまざまな赤の色調を放ち、半ば透明に、半ば発光しながら、生き物の内部を循環しているようだ。

「不滅、永遠、口にすべからざる創造されざる万物の父よ、  
やむことを知らぬ世界の戦車に乗りたる者よ。エーテルの茫漠を支配する者よ、  
汝の座はそのうちに建てられたり。その頂より汝の眼は万物を眺め、  
汝の純粋にして聖なる耳は万物を聞く。汝の子供たるわれらを助けよ、  
汝われらを時の生まれし時より愛せしものなり。汝の荘厳、黄金、茫漠、そして、  
永遠は《星の天》の上に輝きたる。それらの上に汝は昇りたる。おお、汝、《閃く火》よ、  
万物を《耐えられぬ栄光》もて照らす者よ。壮麗の終わりなき流れは《栄光》より発し、  
汝の《無限の霊》を育むものなり。この《無限の霊》は万物を育み、  
永遠に汝を取り囲む無尽たる《生成の宝庫》を作りたる。開闢以来、汝はこの場を  
無数の形で満たしたり。  
この《霊》より、汝の座の回りにあり、汝の宮廷を作りたる最も聖なる王たちが現れる。  
おお、遍在の父よ、唯一無比たる者よ！ 滅、不滅を問わぬ生命の父よ！  
汝は特に汝の永遠たる思念と精髓に似たる《諸力》を創造したる。  
汝は、汝の意志を世界に告げる天使の上に、それらを造りたる。  
最後として、汝はわれらをして、元素の帝国の第三秩序に造りたる。  
われらが連ねん業は、汝の望みを称え、崇めることなり。  
われらは汝への永遠なる熱望を不断に燃やさん、  
おお父よ！ おお、母のなかの母よ！ おお、母性と愛の永遠の祖型よ！  
おお、息子よ、すべての息子のなかの華よ！ すべての形のなかの形よ！  
万物の魂よ、霊よ、調和よ、数よ！ アーメン！」

## b 水の盃の聖別

毎夜、新しい水を「盃」に満たし、次の祈祷文を唱える。翌朝、盃の水を地面（露出した土、岩、草など）に流すこと。祈祷の間、ウンディーネのイメージを「盃」に重ねる。意識のスクリーンのなかに、青い渦が広がっていく。群青色の大海原のなかに、白く輝く波頭に見え隠れして、髪の毛の長い人魚のような生き物が泳いでいる。その下半身は、魚体または海蛇のように細長く銀色の鱗に囲まれているが、長い髪と白い胸乳は驚くほどなまめかしい。よく注意してみると人間とは似ても似つかない顔貌をしているのだが、全体から受ける印象は女性的で美しい。

「恐るべき海の王よ、汝、天の瀑布の鍵を持ちし者よ、地の洞に地下水を囲いし者よ。  
洪水の王よ、春雨の王よ。汝、川と泉の源泉を開きし者よ、汝、いわば地の血潮たる湿気を統べて草の滋養とせし者よ。われら汝を称え、汝を召喚す。汝の可動にして可変の創造物たるわれらに、大嵐のうちに語りかけよ。さればわれら汝の前にて打ち震えん。  
また、透明なる水のせせらぎのうちにて、われらに語りかけよ。  
さればわれら汝の愛を欲さん。  
おお、渇たるものよ！ そのうちにて存在のすべての川が自身を失い、汝のうちに再生せんことを欲さん！ おお汝、無限の完成の大海よ！  
おお、深みに汝自身を映す高みよ！ おお、高みに息を吐く深みよ！  
知と愛を通じ、われらを真の生命に導きたまえ。  
犠牲を通じてわれらを不滅へと導きたまえ。  
さればわれら、いつの日か、罪の赦免として  
汝に水と血と涙を供うに相応しき身とならん！ アーメン」

## c 風の短剣の聖別

室内にいるならば窓を開け、解放した空に「短剣」を擬して次の祈祷文を唱える。その間、シルフのイメージを「短剣」に重ねる。意識のスクリーンのなかで、青空にたなびく霞のような陰が見える。川面に立つ陽炎に似たその線は、人間の目でかろうじて感知できる空気の揺らぎである。しかし、その形なき渦のなかに、長い衣を翻した非人間的なまでに美しい精霊の姿が見える。われらに見えるのは翼に似た空気の揺らぎだけであつたり、整った横顔だけであつたりする。その風貌は天使の像のように鮮烈で、すがすがしいものである。生身の肉体を感じることはないが、ときには人間に似た全身を見せることもある。

「生命の霊よ！ 叡知の霊よ！

その息吹によりて万物に形を与え、また取り去る者よ。

汝、その御前にて万物の生命はうつろう影、すぎゆく陽炎でしかない者よ。

汝、雲に乗り、風の翼の上を歩む者よ。

汝、息を吹けば無限の空に生命を生む者よ。

汝、息を吸えば、汝より出し万物を引き戻す者よ！

永遠の安定のうちの終わりなき運動よ、汝、とこしえに祝福されんことを！

われら汝を賛美し、創造されし光陰と反映と似姿の不易の帝国にて汝を祝福す。

また、われら汝の不動、不落の輝光に対し、終わりなき熱望を抱く。

汝の知霊の光線と、汝の愛の暖かみを、われらに間断なく注ぎたまえ！

されば、不安定は固定されよう。影は実体となろう。風の霊は魂となろう。

夢は思念となろう。

そして、われらもはや嵐にさらわれることなからん。

われら、夜明けの翼馬の手綱を握らん。

そして、われら、宵風の道をを汝の前に差し向けん！

おお、霊中の霊よ！ 魂のなかの永遠なる魂よ！

おお、不滅の生命の息吹よ！ おお、創造する吐息よ！

おお、運動と真理の神聖なる大海たる、汝の永遠なる言葉の流入と流出のうちに、万物の生命を呼吸する口よ！」

## d 地の盤の聖別

床に「パンタクル」を置き、跪拝して次の祈祷文を唱えよ。その間、ノームのイメージを「パンタクル」に重ねよ。意識のスクリーンのなかで、地面が地底の圧力で裂け、ぎざぎざの破口を開く。地底から吹き上げる鈍い赤色に彩られ、地下深くに金属の鉱床が覗いている。その冷たい石と金物の混合物の間を、重い足を引きずって歩く小さな影がある。工具をふるう頑丈な腕、太い胴廻り、岩を刻んだような無骨な表情、暗い影のなかに深紅のルビーを嵌め込んだような両眼だけが輝いている。

「おお、不可視の王よ、地を基としてその深みにまで穴を穿ち、  
全能の力もて満たす者よ。  
汝、その御名もて世界の峰々を揺るがす者よ。  
汝、岩の血脈に七金属を流し込みたる者よ、  
七つの光の王よ、地下に働く者たちに報いる者よ、  
われらを望ましい《風》のなかに導きたまえ、《壮麗の領域》に導きたまえ。  
聖なる都の十二石により、埋められし護符により、地球の中心を貫きし磁石の軸により、  
われら見張り、絶えず働き、求め、望むものなり  
おお、主よ、主よ、主よ！ 苦しむ者たちにあわれみをたまわらんことを。  
われらの心を広げ、精神を解きはなち、高揚させ、われらの性を広げたまわらんことを。  
おお、安定と運動よ！ 輝光に覆われし闇よ！ おお、夜をまといし昼よ！  
おお、汝、職人に決して賃金を惜しまぬ主人よ！ おお銀の白さよ――  
おお、黄金の壮麗よ！ おお生ける調和の金剛石の王冠よ！  
汝、指先にサファイアの指輪の如く天をまといし者よ！  
汝、宝石の王国の地下に星々の驚異の種を隠せし者よ！  
生きよ、統べよ、汝、われらをして守らせたる《財宝》の《永遠の分配者》たれ」

## 7 喚起魔術

### (1) はじめに

この宇宙が、天地創造と呼ばれる過去の極微小の瞬間に完璧な形で無から生み出された訳ではないことは、科学者も宗教家も認めている。この「無からの創造 (CREATIO EX NIHILO)」と対抗する概念、「継続した創造 (CREATIO CONTINUA)」の行為は、その主体が誰であれ、この限定された宇宙が続く限り行われていくのである。ここで主体が誰であれと断ったのは修辭的文句ではない。「創造行為」は神の専売特許ではなく、我々人間さえもが限定的な創造を行い得るからだ。そして、魔術の体系のなかで、最も花形とされる喚起魔術は、この限定的創造行為の一部である。召喚魔術が「盃の技」として、己を無にして行う儀式であるのに対して、喚起魔術は「三角形の技」であり、その限定された時空間に、限定された内容の「創造の技」を挑む儀式だからだ。

喚起魔術は術師よりも靈的發展段階の低い存在を使役する技術である。召喚魔術の項で触れたように、靈格の高い神や大天使を召喚することにより、実効的に人格神の威光を纏い、人間より靈的に高度の存在、惑星のダイモンや天使を喚起することも可能である。それら外的存在と、術師の内的環境を関連づけるために四大構成やその他の魔術的枠組みを利用する。

本項ではクリプトに属する靈の喚起については述べない。

また、四大の喚起を扱うが、『黄金の夜明け魔術全書』にもあるように靈的に劣位の存在に命令するときは、かれらを保護する義務があることを忘れないこと。

### (2) 準備作業

#### a 魔術目的の確認

魔術を行うからには、すべからく目的が重要である。目的意識のない魔術作業は、不成功に終わるばかりか、しばしば危険である。四大の性質に相応する目的を選ぼう。性格の矯正などの内的環境の変化、社会的地位の改善、対人関係の変化、物質的要求の達成などの外的環境の変化など。そして、適当な四大を下の表から導く。

元素	長所	短所	一般的事柄
火の性質	活発 敏腕 果斷	短氣 傲慢 不寛容	力・精力・闘争・所有欲 支配・権力・威信・証拠 名誉・名声・破壊力
水の性質	控え目 従順 直観的	臆病 受動的 輕信的	喜び・結婚・恋愛・出産 独創性・産出力・芸術活動 友情・幸福・宴会・式典
風の性質	陽気 精勵 親切	喧嘩早い 移り気 多弁	健康・病氣・論争・討議 音楽・言語・情報・広告 マスメディア
地の性質	規則的 堅忍不拔 信賴	不確か 強情 利己的	ビジネス・金銭・財産 雇用関係・実務的問題 農園芸業・学業



## b 個人神殿の準備

特別な設備は必要ない。作業の本質は、霊の投影スクリーンたる門を視覚化し、その門越しに元素霊と対話することである。第9章のときと同様に、法衣や、神殿設定は可能ならば行うと良い。より、臨場感を得ることができるだろう。

椅子を置いて、瞑想の準備を行う。(弛緩し、リズム呼吸を行う伝々)

## (3) 喚起魔術の実践

### a 小五芒星の追儼儀式

### b 門の視覚化

目を閉じて、第9章で示した門を視覚化する。色の設定は、次のとおり。

地	—	グノーム	—	黒	水	—	ウンディーネ	—	青
風	—	シルフ	—	黄	火	—	サラマンダー	—	赤

### c 元素霊の喚起

目を閉じたまま、門の柱と屋根で区切られた長方形の空間に補色のスクリーンを作る。このとき扉が開くと想像してはいけない。門を出入する出入りに使うのはまだ先の話だ。この段階では、あくまでスクリーンの上に元素霊たちが影を落とすだけである。正色の門と補色のスクリーンを視覚化したら、対応する魔術武器を取り、十字を切れ。十字は、補色の光を背景に指定色に視覚化する。その上で元素霊に出現を命ずる。

「大天使〇〇〇〇の名において、出でよ〇〇〇〇〇」

その十字が溶け滲みながら、元素霊が、単独であるいはグループで、影絵のように現れるだろう。この召喚の回数を重ねるほど、出現した元素霊の姿は、立体的になり、動き、言葉を発し、豊かな存在感を放射するようになるだろう。

### d 命令または指示

あなたは、任意の命令または指示を与えることができる。

### e 出立許可

目的を達したら、元素霊たちに領域への帰還を命ずる。

「〇の霊〇〇〇〇よ、我が命令を忘れることなく、速やかに去れ、大天使〇〇〇〇の名において」

### f 門の消去

第9章と同じ手順で消去する。

### g 小五芒星の追儼儀式

### h 記録

魔法日記に儀式の内容を記録する。

## 8 諸次元への上昇

### (1) 魔術結社における諸次元への上昇

西洋魔術において一般的な魔術技法である「諸次元への上昇 (rising on the planes)」は、黄金の夜明け団の内陣専用文書『飛翔する巻物』第1巻に説明されている。<sup>(56)</sup> 同書において、次のように定義された霊視の第3段階を適用するものである。

この技法は「生命の木」ダイアグラムに沿って行われる。

中央の柱を上昇し、マルクトからティファレトに至り、この霊的太陽に座を占めて、小径を確認する（位階が許せば、ダースからケテルへと上昇する段階もある。）ものだ。

儀式構成によっては、セフィロトだけではなくパロケトを重視する場合もある。

ネオプラトニズムの伝承では、人間の霊魂が清浄界から星辰界を経由して地上に下降するとき、7惑星の影響力を衣としてまとい。上昇するときは、それを脱ぎ捨てるとされる。その好例が『ヘルメス文書』にある帰昇する霊魂が七つのハルモニア（諸天宮）に帰因する「作用力」を返し、「第八のもの」に至る描写にある。<sup>(57)</sup>

なお、ディオーン・フォーチュンはこの技法の詳細な検討を実施している。<sup>(58)</sup>

### (2) カバラの起源

メルカバ神秘主義における「霊魂の帰天」は、後期グノーシスの『イエウーの二つの書』の記述等と驚くべく類似性を有する。<sup>(59)</sup> その他の中東における「上昇神話」を解析しても、同様の結果が現れるので、門番の恫喝を印章を利用して突破するというスタイルは当時の常識（流行）であったと推察される。

さらに後代に至ると、カバラの木を登る技法、またはより単純化された柱の上昇技法に分化していく。偽メシアとして有名なサバタイ・ツェヴィイはハシディズムの技法を多用したが、シヨールムはサヴァタイ・ツェヴィイの修行について「ひとつの次元から次の次元に、そしてゲドゥラーからマルクトまでの7次元を全て上昇していった。2年間かけてこの行を完成させたとき、そこに母を見た。」と語っている。<sup>(60)</sup> もちろん、現代社会に住む魔術師が諸次元への上昇に2年もかけるとは思えない。より確実に早い手段が追求されるであろう。

古典古代から中世にかけてのユダヤ教カバラの修行法は、術者に高度な「想像的創造力 (Imaginatio Creatrix)」と緻密な記憶力とを必要とした。古代エジプト人が膨大な否定告白のリストを覚えなくても、死者を支援する呪符が保証すると脳天気信じたのとは異なり、天界への上昇を実践した神秘家は、何十もの挑戦する天使等の名前と性質のリストを暗記し、生命賭けで望んだのである。どちらにせよ、想像力が鍵であった。イサク・ルーリアの弟子ハイム・ヴィタルは、神秘家が次元界に上昇したときの想像力の機能を『聖なる門』のなかで、次のように語っている。

「人はかれ自身より大切な聖なる霊魂を有しており、その霊魂が神の山において主の御相貌の前に上昇したとき、・・・真実を見て、想像力の機能を介し、これらすべてを遠隔地の肉体

(56) フランシス・キング編『飛翔する巻物：高等魔術秘伝』国書刊行会、1994年、88頁。

Ed. by F.King, *Astral Projection, Ritual Magic, and Alchemy*, Wellingborough : The Aquarian Press, revised 1987, p.76.

(57) 『ヘルメス文書』朝日出版社、1980年、74-76頁。

(58) Charles Fielding, C.Collins, *The Story of Dion Fortune*, Thoth Publications, 1998, pp.165-174.

(59) 「汝らが身体の外に出て最初のアイオーンに到達したとき、そのアルコンが現れたら、この印章により自らを封印し、・・・『プロテトベルソムボン・チェースよ、退け。汝ら、第1のアイオーンのアルコンたちよ。われはエアザ・ゼオーザス・ゾーゼオスと呼びたり。』なる弁明を唱えよ。」(『イエウーの第2の書』52章)

(60) Gershom Scholem, *Researches in Sabbateanism*, ed. Yehuda Liebes, Tel Aviv : Am Oved, 1991, pp.214f.

に見せるとき、想像力こそ必要であり、(曰く)『預言者を介してわれはイメージを結ぶ』のである。」<sup>(61)</sup>

さて、柱について考察すると、そも柱とは屋根を支えるものである。13世紀にラビ・モーゼス・ベン・ナハマン(いわゆるナハマニデス)は、「二重天界理論」を唱えた。ナハマニデスはカバラ研究家に多大の影響を与えた人物であり、かれの二重天界の構想を補完するかたちで14世紀には、上位の天界と下位の天界との間を二本の柱を結び、柱を神の霊が上下するという思想が生まれる。この二本の柱とは荒野を彷徨うユダヤ民族を先導した火の柱と煙の柱である。

この柱を通して正しき者は、天界に上昇できる。柱に面した者は三色の光が解け合う様を見ろという。近づくと柱は火花を散らし、無数の色彩に溢れる。そして、人を天界の輝きが満たすのである。<sup>(62)</sup>

上昇(アリヤー)するためには、場所(マコム)が必要である。<sup>(63)</sup>まさしく、モーゼス・コルドヴェロによれば「地上の天界は、そこを通じて天上の天界に上昇するための開口部又は門扉である。」<sup>(64)</sup>

これらの解釈によれば、上昇するための場所は下位の天界であるが、カバリストは聖別の儀式により現出する地上の神殿と下位の天界とを同一視した。<sup>(65)</sup>

一方、われわれは魔術儀式の基盤になるアストラル神殿にそれを求める。

さらに、柱を登り、天上の神殿、または天界に上昇すると神秘家は神の御前、すなわち「栄光の座」のある広間に達する。

『大へハロース』において、栄光の座に直面する神秘家の性愛的な暗喩を含んだ状況が描かれている。

われにみせし告白を証明せよ  
汝が父ヤコブの面にわれがなせしことを  
そはわが栄光の座に刻まれし  
汝がわが前に見たように、聖なるかな  
われはその上に身をかがめ、それを掴み、それを抱擁し、接吻する  
その腕の上にわが手は日に三度置かれ  
汝がわが前に、聖なるかなを唱えるとき  
そは語りき  
聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな  
(大へハロース シノプセ §§ 99 <sup>(66)</sup>)

さらにウルフソンは、この件で用いられる「炎」という単語がS h H I Aの三人称女性形であることを指摘している。<sup>(67)</sup>

さて、柱が地上の神殿から上位の天界に駆け上るならば、その軌跡は下界を見下ろす五つの神の相貌(パルツフィム)に触れていくとも言える。イサク・ルーリアの解説する相貌は、次

(61) Elliot R. Wolfson, *Through a Speculum That Shines*, Princeton : Princeton University Press, 1994, pp.321f.

(62) *Zohar* II fol.210a

(63) Maimonides, *The Guide of Perplexed*, Chicago: Chicago University Press, 1963, I : 8, pp.33f.

(64) Moshe Idel, *Ascensions on High in Jewish Mysticism*, Budapest : Central European Univ. Press, 2005, p.118.

(65) Ed. Joseph Dan, *BINAH* Volume 2, New York : Praeger Publishers, 1989, pp.7f.

(66) Ed. Peter Schafer, *Übersetzung der Hekhalot-Literatur* II § § 81-334, Tübingen : J. C. B. Mohr, p.18f.

(67) Wolfson, p.101, n.125.

のとおり。<sup>(68)</sup>

相 貌	名 称	ヘブル語名称	意 味	帰 属
第1の相貌	アrik・アンピン	אֲרִיךְ אֲנַפִּין	大いなる貌	ケテル
第2の相貌	アツバ	אָבָא	父	コクマー
第3の相貌	アイマ	אִמָּא	母	ビナー
第4の相貌	ザウイル・アンピン	זְאוּיִל אֲנַפִּין	小さな貌	ティファレト
第5の相貌	ヌクバ	נְקֻבָּה	女性性	マルクト

### (3) 諸次元への上昇の実践

- a 小五芒星の追儼儀式
- b 七の小封印
- c 上 昇

東を向いて宣言する。  
 「主の相貌の影に歩みださん。」  
 東の壁の中央に次元界へと続く扉を視覚化する。

扉に向い地の象徴を描き、引き続き、主の第5の相貌の名前を発音する。  
 「ヌクバー」  
 緑の草原が東の壁いっぱい広がる。  
 ためらいなく草原を歩き始めよ。

草原の上をおだやかな風が吹き過ぎ、草の波が踊る。  
 マルクトの影の宮の空には、やわらかな霧がたちこめている。それは神の女性的な霊気、ヌクバーと呼ばれ、シェキナーとも呼ばれる神の第五の相貌である。最も地上に近いと表現されるが最下位の相貌ではない。神の五つの相貌は、それぞれの役割を分担するアダム・カドモン・ペルソナの一枚に過ぎないのだ。

あなたは畏怖しつつ空を仰ぐ。霧に閉ざされたなか、髪が長く鼻梁の高い女性の横顔が見えるような気がする。その巨大な横顔の唇が開く。唇から突風が吹き寄せ、あなたの下腹部を乱暴に叩く。下腹部に鈍い痛みとともに、右の凶形が血の滲む円盤状の焼き印として浮き出る。女性の影のような気配を肌身に感じながら草原を進む。草原の前方に丘が現れ、二本の石柱が聳えている。次の扉である。



扉に向い風の象徴を描き、引き続き、主の第4の相貌の名前を発音する。  
 「ザウイル・アンピン」

(68) Lawrence Fine, *Physician of the Soul, Healer of the Cosmos : Isaac Luria and His Kabbalistic Fellowship*, Palo Alto : Stanford University Press, 2003, pp.138-141.

眩い黄金の輝きが東の空を満たす。  
ためらいなく丘を登りなさい。

なだらかな丘陵は、真昼の太陽に照らされていた。

あなたは畏怖しながら太陽を直視しないように空を仰ぐ。その黄金の円盤のなかに、小さな男性の横顔が滲んでいるような気がする。その横顔の唇が開く。

唇から突風が吹き寄せ、あなたの胸を乱暴に叩く。心臓に鈍い痛みを感じるとともに、右の図形が血の滲む円盤状の焼き印として胸の中心に浮き出る。

あなたは光のなかの影のような小さな貌の気配を頭上に感じながら丘陵をゆっくりと降りる。

草原に湖が現れ、石畳のすべりが湖面に向い傾斜している。次の扉である。

扉に向い水の象徴を描き、引き続き、主の第3の相貌の名前を発音する。

「アイマ」

青い湖面の輝きが視界を満たす。  
ためらいなく湖面に下りなさい。

鏡のように静かな湖面は、翡翠色の輝きに満たされ、やわらかく訪問者の足を支えた。一瞬でも気を抜くと水の表面張力が失われ、湖底深く呑み込まれそうな不安から誰もが足下を覗き込む。やがて、翡翠色の水面の左手奥に何か不定形の貌のようなものが見えてきた。それはあまりにも深くにあるのでかたちが不明瞭だが、女性の横顔のようにも見える。

そして、その唇らしきものが微笑みを浮かべると、円形につぼまり吐息を吐いた。水底から一握りの泡が浮上し、水面を割り、ひとしずくの水滴があなたの左頬を叩く。

氷に触れたような鈍い痛みが左側の頬の中心を叩く。それと同時に、右の図形が血の滲む円盤状の焼き印として左頬の中心に浮き出る。

あなたは水底の貌の気配を足下に感じながら湖面を渡る。  
湖の対岸が現れ、砂の道が見える。次の扉である。

扉に向い火の象徴を描き、引き続き、主の第2の相貌の名前を発音する。

「アッパ」

陽炎のたつ熱砂の世界が視界を満たす。  
ためらいなく砂漠に入りなさい。

白く枯れた砂がどこまでも広がっていた。確かに濡れていたはずの足は瞬時に乾燥し、灼けた空気が鼻腔を襲う。足下で頼りなげに砂が踊った。四周は不可思議な風紋を刻まれた砂丘が囲んでいる。右前方の砂丘の表面には、風紋で描かれた貌のような陰が見えた。その男性の横顔に見える砂絵の唇にあたる部分が動く。前方から砂混じりの風が吹きつけた。

火花を受けたように鈍い痛みが右側の頬の中心を叩く。それと同時に、右の図形が血の滲む円盤状の焼き印として右頬の中心に浮き出る。

あなたは風により変化する砂丘の貌を右目にしながら砂漠を横断した。  
前方に椰子の林と水音のするオアシスが現れる。次の扉である。

扉に向い霊の象徴を描き、引き続き、主の第1の相貌の名前を発音する。

「アrik・アンピン」

穏やかなオアシスに到着した。



ためらいなくオアシスに入りなさい。

オアシスの内部は砂漠から想像していたより遙かに広大だった。椰子の林は外周を包み込んでいたが、その内部は見たこともない鮮やかな花を咲かせた草花、瑞々しい果実を実らせた灌木が連携する庭のような風景になっている。左右に二本ずつ銀色に蛇行する光の線があるのは四つの小川があるのだろうか。上空を見上げるとオアシスの中央に天蓋を提供するように巨大な積乱雲が山のように聳えている。雲を見つめていると、その全体が巨大な横顔のように思えてくる。

雲の唇が微かに動くと、甲高い風音が響きわたり、あなたの額の中心に鈍い痛みが走る。それと同時に、右の図形が血の滲む円盤状の焼き印として額の中心に浮き出る。



あなたは雲のなかの大いなる貌を意識しながら、オアシスの中心に向かって進み続ける。やがて前方から複雑な光が射してくる。それは1対の樹木の果実が放つ輝きであった。前方の樹木は白く朧に輝き、無数の黄金の果実を輝かせている。その後ろに兄弟のように同じかたちの樹木があるが、樹皮は黒檀のように黒く鈍い輝きを放ち、その果実は黒い無花果のような柔らかい果皮につつまれている。あなたは唐突に気づく。これこそ失われたエデンにある「生命の木」と「善と悪の知識の木」なのである。

杖で木の前の石を射しなさい。その石の前から清涼な水が湧きだし、四つの流れに別れてオアシスたるエデンを潤している。

杖で基石を叩く。 11111 111111

園の光景がフェイドアウトした。あなたは磨きあげられた床と高い天上の広間にいる。広間の奥の祭壇に向かい跪き、あなたの心の内奥の密やかな願い、または、祈りを告げる。

#### d 地上への帰還

地上への帰還を強く念じる。

#### e 小五芒星の追儺儀式

#### f 記 録

## 第10ヶ月目の瞑想

### 瞑想課題：無の瞑想

今月の瞑想は、「無」についての瞑想である。瞑想行の行き着くところは、人間の理性的理解を越えた領域を直観的に把握することにある。われわれは「無」をイメージすることはできない。また、「無」とは自らの「死」と同様に生理的な恐怖を呼び起こし安いテーマである。この瞑想の最中に無に引きずりこまれそうになったら無理をしないこと。

第1週は、暗黒空間としての「無」を視覚化することを試みなさい。虚無の空間、純粋な暗黒を視覚化すること。もちろん、これらは「無」ではない。空間は原子ひとつさえない宇宙空間でも空間に過ぎず、暗黒は暗黒である。しかし、「無」を掴む手掛かりとなるだろう。

第2週は、純粋な透明の虚無の空間を視覚化しなさい。その背景には、暗黒を含めて色を入れてはいけない。例えば、無限の遠方まで広がっている完璧に透明な無色の水晶を覗き込んでいるとでも想像してみると良いだろう。カバラではこれを聖書の記述に結びつける。「神の足下にはサファイヤの敷石のごときものがあり、澄み渡る蒼空のごとくであった」(『出エジプト記』24章10) それ故、この靈視は「サファイヤの透明さ」(リヴェナス ハ・サフィル) と呼ばれている。

第3週は、やや説明が困難である。「無とは頭の後ろに見えるものようだ」と言われている。道具を使わずに頭の後ろを見ることはできない。このジレンマのなかに無の概念が潜んでいる。アブラハム・アブラフィアは、「頭のなかに見えるものについて観想せよ」と言ったが、これも同様である。見えないものを見ることにより、「無」を瞑想しなさい。

第4週は、任意の方法で「無」を瞑想しながら、同時に意識のなかから思考・雑念をすべて消し去りなさい。いかなる映像も観念も「考えるな」という命令さえ消し去りなさい。意識のなかに「無」だけを満たしなさい。

## 今月の読書

今月の学習の参考になる著作は、以下のとおりである。図書館で読むのも良いが、必読図書については購入することを勧める。

### 1 必読図書

グスタフ・デイヴィッドスン『天使辞典』創元社、2004年。

辞書を勧めるのは例外的だが、座右の書に相応しい書物である。

### 2 参考図書

鈴木 研二『悟りの冒険－深層心理学と東洋思想』創元社、1990年。

F. M. クロス『カナン神話とヘブライ叙事詩』日本基督教出版局、1997年。  
(古本相場では高額なので、まず、図書館で探してください。)

**Mclean, Adam. *A Treatise on Angel Magic*. Newburyport : Weiser Books, 2006.**



## 第10ヶ月目の課題

この課題は、今月の作業が終了した後に記入しなさい。記入した課題は魔法日記のコピーと一緒に提出すること。

- 1 魔術師のプロトコールが目的とするものは何か。
- 2 クリポトの世界とこの世界の対比を自分の言葉で行うこと。
- 3 第11番目の魔王ルシフェルの役割は何か。
- 4 あなたは四大とは何だと思うか。
- 5 意識開発を試みたか。試みた者はその結果を述べなさい。
- 6 四大武器を製作したか。製作した者はその概要（出来具合、充填の結果）を述べなさい。
- 7 四大の元素霊を喚起したか。喚起魔術を行ったものはその結果を述べなさい。